史跡 斎宮跡

平成27年度発掘調査概報

2017年3月

斎宮歴史博物館

第 186 次調査区全景と「さいくう平安の杜」（北から）

ＳＫ 10856・10857 出土状況（南から）

序

平成28年の伊勢志摩サミットの開催に伴い、三重県の歴史・文化は国内のみならず、世界的にも注目されつつあります。先の平成27年度は、４月には明和町で日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ　斎宮」に認定され、９月には平安時代の３棟の復元建物を中心とした「さいくう平安の杜」が完成し、斎宮跡全体がサイトミュージアムとして、その魅力を発信しております。

今後、斎宮歴史博物館、いつきのみや歴史体験館と合わせて、斎宮跡を訪れるすべての方に、史跡斎宮跡の歴史と文化を体験、体感していただける場所として、末永く活用していただくことを切に希望します。

さて、今回報告する発掘調査は、史跡の実態を解明するため、下園東区画の北西部で行ったものです。平安時代初頭にさかのぼると考えられる南北の方格地割の道路側溝、文字や記号が刻まれた土器などを確認しました。調査で得られた成果は、地元明和町の皆様をはじめ、ひろく県民の皆様や斎宮跡を訪れる皆様に還元できますよう、積極的に情報発信してまいります。

史跡斎宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、斎宮跡調査研究指導委員ほか多くの方々や、発掘調査にあたり様々なご配慮・ご協力を頂きました国史跡斎宮跡協議会をはじめとした地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

最後とはなりましたが、2015年10月６日に、斎宮跡調査研究指導委員の八賀晋先生がご逝去されました。八賀先生は、古代史を中心として日本考古学界に大きな足跡を残すとともに、斎宮跡の解明についてもご尽力されました。ここに、これまでの感謝とともに、謹んで哀悼の意を表します。

2017（平成29）年３月

斎宮歴史博物館

館　長　　濱　口　尚　紀

例　言

1　本書は、斎宮歴史博物館が平成27年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第186次調査）の概要をまとめたものである。

2　明和町が調査主体となって実施した、史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第185次調査報告書は、別途明和町が刊行している。

3　遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。

4　遺構時期区分の指標となる土器の分類と年代観については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ』斎宮歴史博物館、2001年）、大川勝宏2010「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要十九』斎宮歴史博物館、大川勝宏2005「平安時代後期の斎宮跡」『明和町史　斎宮編』による。

5　斎宮跡の時期区分については土器の編年に基づき、期と段階を用いて「斎宮跡Ⅱ期第1段階」等と表記すべきであるが、本文中ではこれを簡略に「斎宮Ⅱ－1期」等と表現している。

6　遺構表示記号は次のとおりである。

ＳＡ：柱列・塀　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＦ：道路　ＳＫ：土坑　ＳＺ：落ち込み・その他　Pit：柱穴、ピット

7　遺物実測図は基本的に実物の４分の１で行っているが、一部の遺物は原寸大で掲載している。遺物写真は縮尺不同である。

8　土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行『日本の伝統色』第５版（1989年）を用いて補っている。

9　遺物の漢字表現は、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いる。ただし、参考文献からの引用の場合にはこの限りではない。

10　本書の執筆・遺物写真の撮影は、宮原佑治があたり、編集は調査研究課で行った。また発掘調査および資料整理については、大川勝宏・穂積裕昌・伊藤文彦・杉原泰子・八木光代・西川千晶が補佐した。

目　次

Ⅰ　前言 …… 1

Ⅱ　第 186 次調査 …… 7

挿図目次

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図 …… 3

第Ⅰ－２図　平成 27 年度発掘調査区位置図 …… 4

第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図 …… 5

第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図 …… 6

第Ⅱ－１図　第 186 次調査　グリッド図 …… 7

第Ⅱ－２図　第 186 次調査　調査区位置図 …… 8

第Ⅱ－３図　第 186 次調査　遺構平面図 …… 9

第Ⅱ－４図　第 186 次調査　土層断面図 …… 10

第Ⅱ－５図　第 186 次調査　ＳＤ 10852・10854・10859 断面図／
ＳＫ 10856・10857・10858 出土状況図・断面図 …… 12

第Ⅱ－６図　第 186 次調査　ＳＢ 10853 平面図・断面図・出土状況図／
ＳＤ 10849・10851（ＳＦ 10850）断面図 …… 15

第Ⅱ－７図　第 186 次調査　ＳＺ 10841 平面図・断面図 …… 16

第Ⅱ－８図　第 186 次調査　ＳＺ 10845 平面図・断面図／
ＳＫ 10842・10855 出土状況図・断面図 …… 17

第Ⅱ－９図　第 186 次調査　出土遺物実測図１ …… 19

第Ⅱ－ 10 図　第 186 次調査　出土遺物実測図２ …… 20

第Ⅱ－ 11 図　第 186 次調査　出土遺物実測図３ …… 21

第Ⅱ－ 12 図　第 186 次調査　出土遺物実測図４ …… 22

第Ⅱ－ 13 図　第 186 次調査　出土遺物実測図５ …… 24

第Ⅱ－ 14 図　下園東区画の調査成果 …… 25

写真図版目次

巻頭図版　第186次調査区全景と「さいくう平安の杜」（北から）／ＳＫ 10856・10857 出土状況（南から）

写真図版１　南調査区東側全景（北から）／南調査区西側全景（北から）…… 29

写真図版２　北調査区全景（北から）／ＳＫ 10856・10857・10858 出土状況（南から）…… 30

写真図版３　ＳＫ 10856 下層出土状況（南から）／ＳＦ 10850 南側（北から）…… 31

写真図版４　ＳＦ 10850 北西側溝群（ＳＤ 10831 ほか・北から）／ＳＤ 10830（東から）／
ＳＺ 10841（南から）…… 32

写真図版５　ＳＺ 10845（南西から）…… 33

写真図版６　出土遺物（１）…… 34

写真図版７　出土遺物（２）…… 35

写真図版８　出土遺物（３）…… 36

表目次

第Ⅰ－１表　平成27年度発掘調査一覧表 …… 2

第Ⅱ－１表　第186次調査　掘立柱建物一覧表 …… 18

第Ⅱ－２表　第186次調査　遺構一覧表 …… 18

第Ⅱ－３表　第186次調査　遺物観察表（１） …… 26

第Ⅱ－４表　第186次調査　遺物観察表（２） …… 27

第Ⅱ－５表　第186次調査　遺物観察表（３） …… 28

Ⅰ　前　　言

1　調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは10月に開館した斎宮歴史博物館が史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査では、史跡西部に所在すると想定される飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することが課題であるほか、史跡東部に存在した方格地割と平安時代の斎宮跡中枢部の解明も重要な課題である。

近年、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まったことから、平成18年度に「史跡整備の在り方検討会」を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向を示した。そして、平成22年3月に『史跡斎宮跡東部整備基本計画書』を策定し、平成23年度からは現地での工事に着手して平成27年10月、史跡公園「さいくう平安の杜」が竣工した。

一方、明和町でも「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づき、平成23年度から「明和町歴史的風致維持向上計画」の策定に取組み、平成24年6月6日に国の認定を受けた。同計画では、下園東区画周辺において来訪者の案内・交流を目的とした整備を計画しており、それに先立った発掘調査を下園東区画において平成24年度に行い、平成27年度から工事に着手している。さらに、平成27年4月24日に「祈る皇女斎王のみやこ　斎宮」が日本遺産として認定された。

発掘調査

史跡東部の方格地割の構造解明は斎宮跡の発掘調査における重要課題の一つである。下園東区画においては、これまで区画中央から南東部を中心に調査が行われており、斎宮Ⅱ－1期からⅡ－2期にかけての5間×2間の大型掘立柱建物が規則的に配置されていたことが確認されている。その一方で、区画の北西部では調査の及んでいない範囲が広く残されており、東側と同様の建物が区画の北西部にも展開するのかを解明することが危急の課題であった。

上記の課題を受け、下園東区画の実態解明を目的として、平成24年度には第178－2次調査を、そして平成27年度には第186次調査を実施した。調査面積は、第186次調査は536㎡で、調査期間は平成27年12月14日～平成28年3月30日であった。

整備

史跡東部整備事業は、柳原区画の発掘調査で確認した掘立柱建物3棟の復元や平安時代の方格地割の広がりを示す区画道路の整備など、平安時代の斎宮の姿を再現するもので、平成27年度は、復元建物建築工事が7月に完成し、基盤整備等工事の完成した10月に竣工した。その後、便益施設建築工事が平成28年1月に、造園整備等工事は3月に完成し、同月に整備事業報告書も刊行した。また、斎宮歴史博物館と上園芝生広場を結ぶ古代伊勢道（旧称：奈良古道）の整備工事も12月に完成した。

発掘調査現場の公開・活用

近年斎宮歴史博物館では、史跡への来訪者増加や魅力の向上を目標として、発掘調査現場の積極的な利活用を行っている。具体的には、発掘調査見学者への随時公開・説明、ホームページを通じた情報発信とともに、現地説明会や夏休み子ども体験発掘教室、学校団体等の体験発掘を開催している。

2　調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

＜第186次調査＞

・平成27年度

大川勝宏（課長）

穂積裕昌（主幹兼課長代理）

伊藤文彦（技師）

宮原佑治（技師）

・平成 28 年度

大川勝宏（課長）

穂積裕昌（主幹兼課長代理）

伊藤文彦（主査）

宮原佑治（主任）

3　斎宮跡調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成 28 年 2 月 4 日に斎宮跡調査研究委員会を開催し、第 186 次調査を含む下園東区画の性格や明和町の整備事業について指導や助言を得たほか、復元建物については斎宮跡研究員も同席して指導を受けた。指導委員・研究員の方々は下記のとおりである。

〔平成 27 年度指導委員〕

浅野　聡（三重大学大学院准教授）

稲葉信子（筑波大学大学院教授）

金田章裕（人間文化研究機構機構長）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）

所　京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）

八賀　晋（三重大学名誉教授）

増渕　徹（京都橘大学教授）

松村恵司（奈良文化財研究所長）

渡辺　寛（皇學館大学名誉教授）

綿貫友子（大阪教育大学教授）

〔研究員〕

黒田龍二（神戸大学大学院教授）

（五十音順・敬称略）

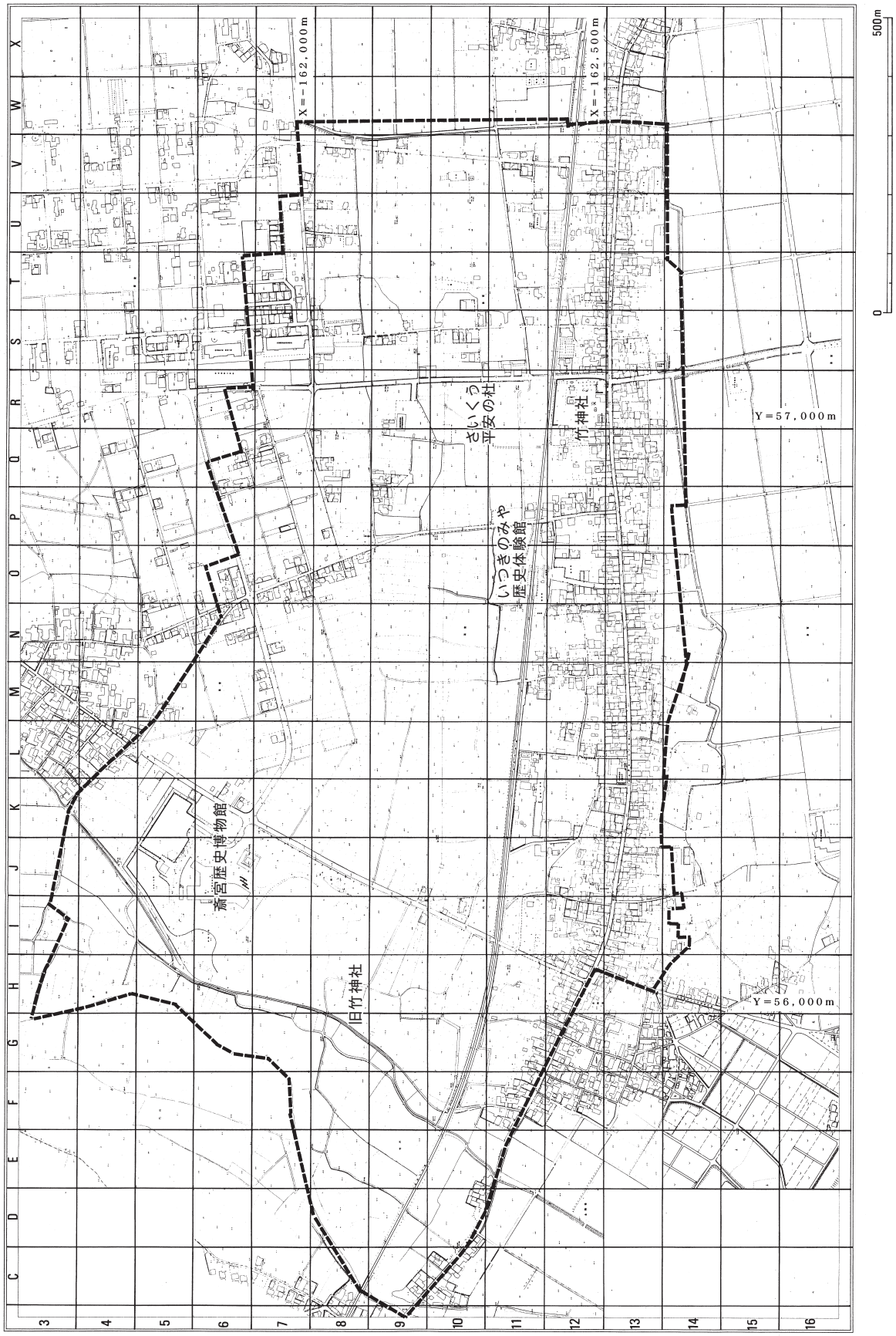
調査次数	地区	面積（㎡）	調査期間	位置	土地所有者	現状変更	保存地区区分
186	Q8,Q9	536.0	H27.12.14～H28.3.30	明和町大字斎宮字下園	明和町	計画発掘調査	1
185-1	R7	23.2	H27.7.13～7.14	明和町大字斎宮字西前沖	明和町	史跡斎宮跡維持管理倉庫等建設	4
185-2	J12	12.0	H27.7.22～7.27	明和町大字竹川字東裏	個人	住宅改築	4
185-3	L12,M12	72.2	H27.8.3～10.16	明和町大字斎宮字広頭	明和町	プール移転	3
185-4	R11	0.5	H27.8.5～8.6	明和町大字斎宮字柳原	明和町	史跡整備	1
185-5	Q14	23.3	H27.8.19～8.28	明和町大字斎宮字鈴池	個人	住宅新築	3
185-6	M6,M7	4.7	H27.9.14～9.29	明和町大字斎宮字篠林	個人	下水管	4
185-7	R7	28.3	H27.9.15	明和町大字斎宮字楽殿	明和町	休憩所建設等	1
185-8	P6	10.6	H27.10.6～10.7	明和町大字斎宮字楽殿	個人	住宅新築	3
185-9	L5	2.7	H27.10.8	明和町大字竹川字古里	個人	住宅新築	3
185-10	M11,N11	2.4	H27.10.14	明和町大字斎宮字内山	明和町	史跡整備	1
185-11	L13	34.3	H27.11.4～11.13	明和町大字斎宮字牛葉	個人	住宅新築	4
185-12	W8	0.0	H27.10.14	明和町大字斎宮字東前沖	明和町	排水路	3
185-13	H11,H12,I11	27.9	H27.1.26～	明和町大字竹川字中垣内	三重県	側溝付替	3
185-14	R7	61.4	H28.2.23～3.15	明和町大字斎宮字楽殿	個人	住宅新築	3
185-15	V7	27.3	H28.2.23～3.15	明和町大字斎宮字東前沖	個人	住宅新築	3

第Ⅰ－1表　平成 27 年度発掘調査一覧表

第Ⅰ－１図　史跡斎宮跡位置図（1:50,0000・国土地理院 1/25,000「松阪」「明野」を改変）

第Ⅰ－２図　平成 27 年度発掘調査区位置図（1:10,000）

第Ⅰ－３図　斎宮跡方格地割区画名称図（1:5,000）



第Ⅰ－４図　史跡斎宮跡における大地区表示図（2002 年）

Ⅱ　第 186 次調査
６ＡＱ８・９下園地区

１　はじめに

第 186 次調査区は、平安時代斎宮の方格地割でいう下園東区画の北西隅部を中心に、方格地割区画道路（以下、区画道路）上に位置する。四周する区画道路を含めて、下園東区画では過去に、第８－10 次・10 次・13 次・17 次・18－１次・18－２次・23 次・25－５次・156 次・166 次・168 次・174－８次・176 次・177 次・178－２次・180 次の計 16 回の調査が行われており、斎宮Ⅱ－１期からⅡ－２期の寮庫と考えられる５間×２間の掘立柱建物が区画全体に等間隔で展開することが明らかとなりつつある。これは東に隣接する西加座北区画でも確認されている延床 55㎡を超える大型の５間×２間の掘立柱建物が等間隔で展開する様相と同様であり、このようなあり方は斎宮寮の倉庫、寮庫としての性格が考えられる。

第 186 次調査は、こうした寮庫のある下園東区画の北西隅部と下園西区画との境界区画道路の様相を解明するため、大型の５間×２間建物を確認した第 178－２次調査区の西隣に調査区を設定した。以下、第 186 次の調査結果を報告する。なお、第 186 次調査の調査面積は 536㎡、調査期間は平成 27 年 12 月 14 日～平成 28 年３月 30 日であった。

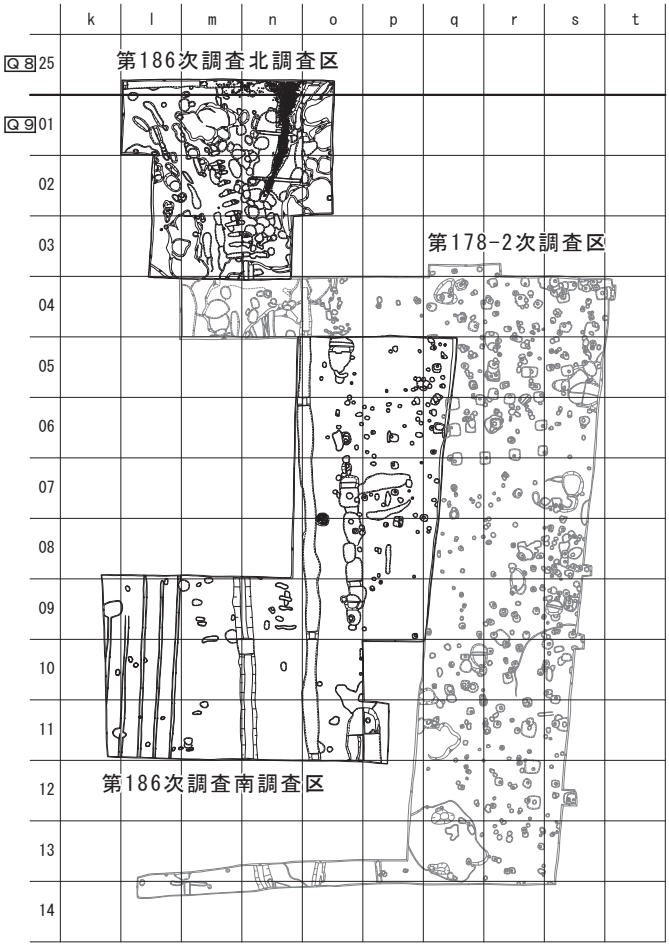
２　地形と層位

調査区は現況畑地の平坦地である。北調査区は全体が標高 9.65 ～ 9.75 ｍで推移し、大きく高さの変化はみられない。南調査区は北端で標高 9.90 ～ 9.95 ｍと北調査区よりも高く、南下するにつれて標高 9.70 ～ 9.75 ｍへと下がっていく。このことから南調査区の北端が周囲よりやや高くなる微起伏を有するが、南調査区の南方では、現況でも 0.3 ｍ程低くなる箇所もあり、湿地状を呈している。また北調査区の地山面も水はけが悪く、降雨時には水没することが多くみられた。そのため、全体的に厚さ 0.4 ～ 0.5 ｍの盛土が近世に施されている。

基本層位は、北調査区で表土（耕作土）、近世盛土、包含層、地山からなり、地山面までの深さは 0.65 ｍある。南調査区では、表土（耕作土）、地山からなり、地山面までの深さは 0.15 ～ 0.2 ｍである。南調査区では耕作土が地山直上までみられ、包含層や黒ボク層は確認できなかった。地山はいずれも黄褐色系のシルトで、遺構の検出は礫敷遺構 SZ10845 を除き、地山の上面で行った。

３　遺構

第 186 次調査では、道路に関わる遺構が数多く確認できた。一つ目は奈良時代末葉から平安時代初頭にかけて方格地割造成段階の南北区画道路の東側溝、二つ目は平安時代後期の方格地割北辺東西道路

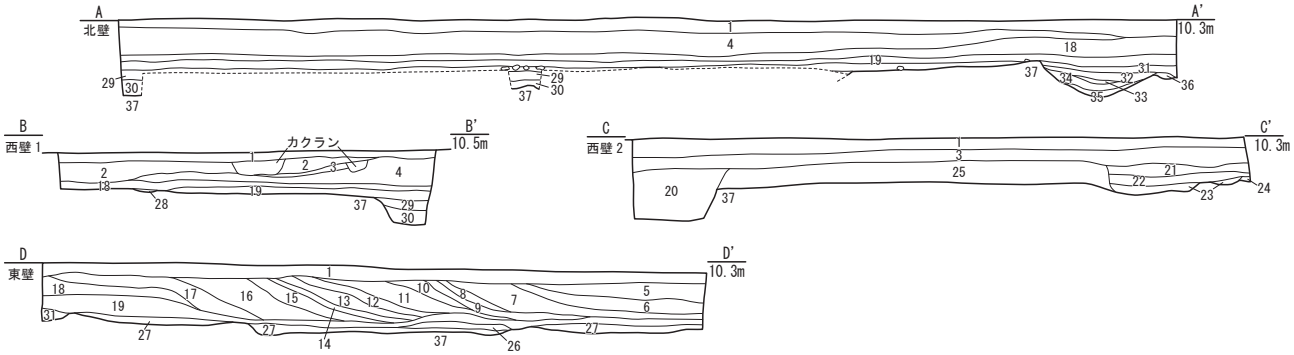


第Ⅱ－１図　第 186 次調査　グリッド図（1:500）

第Ⅱ－２図　第 186 次調査　調査区位置図（1:2,000）

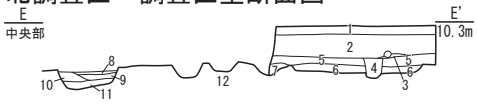
第Ⅱ－３図　第 186 次調査　遺構平面図（1:200）

北調査区　調査区壁断面図



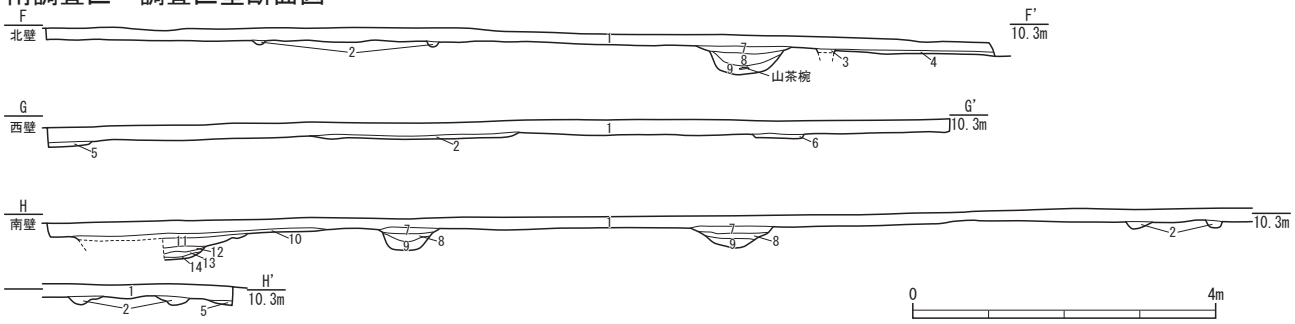
1　2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂【表土】
2　10YR4/6 褐色極細粒砂～シルト【盛土】
3　10YR6/8 明黄褐色シルト【盛土】
4　10YR4/4 褐色極細粒砂【盛土】
5　10YR4/4 褐色極細粒砂～シルト【盛土】
6　7.5YR5/8 明褐色シルトに 10YR3/4 暗褐色極細粒砂～シルトを層状に 20%含む【盛土】
7　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに 7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを５%含む【盛土】
8　10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルト【盛土】
9　10YR4/3 にぶい黄褐色シルトに 7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを 30%含む【盛土】
10　10YR3/4 暗褐色極細粒砂～シルト【盛土】
11　10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂～シルト【盛土】
12　10YR4/4 褐色極細粒砂～シルト【盛土】
13　10 層に 7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを５%含む【盛土】
14　10YR3/4 暗褐色極細粒砂～シルト【盛土】
15　10 層に 7.5YR5/8 明褐色シルトブロックを５%、φ10 cm以下の礫をわずかに含む【盛土】
16　12 層にφ5 cm以下の礫をわずかに含む【盛土】
17　10 層と 7.5YR5/8 明褐色シルトの混合土【盛土】
18　10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂～シルト【包含層】
19　10YR3/3 暗褐色細粒砂～シルト【包含層】
20　10YR3/3 暗褐色中粒砂～細粒砂【カクラン？】
21　10YR6/8 明黄褐色シルトに 10YR3/3 暗褐色極細粒砂～シルトを 10%含む【盛土】
22　10YR3/3 ～ 3/4 暗褐色極細粒砂～シルトに φ５cm以下の礫をわずかに含む【盛土】
23　7.5YR6/8 橙色シルトに酸化褐色粒を５% 含む【盛土】
24　10YR2/3 黒褐色極細粒砂～シルトに 10YR6/8 明黄褐色シルトを粒状に 10%含む【盛土】
25　5YR4/8 ～ 5/8 赤褐～明赤褐色シルトに炭化物を粒状に３%含む
26　10YR3/4 暗褐色シルトに 7.5YR5/8 明褐色シルトを層状に 30%含む【カクラン埋土】
27　10YR3/4 暗褐色シルトに 7.5YR5/8 明褐色シルトを層状に 10%含む【カクラン埋土】
28　19 層に地山を粒状に 10%含む【ピット埋土】
29　10YR3/2 黒褐色極細粒砂に 10YR2/2 黒褐色シルトを粒状に５%含む【ＳＤ10830 上層】
30　10YR2/3 黒褐色極細粒砂に 10YR2/2 黒褐色シルトを 30%含む【ＳＤ10830 下層】
31　10YR3/4 暗褐色細粒砂～極細粒砂 下層面に鉄分沈着【ＳＤ10846 上層】
32　10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂に酸化褐色粒を５% 含む【ＳＤ10846 上層】
33　10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂～細粒砂【ＳＤ10846 中層】
34　10YR3/2 黒褐色シルト【ＳＤ10846 下層】
35　10YR3/3 暗褐色シルトに地山粒を 20%含む【ＳＤ10846 下層】
36　31 層に地山ブロックを 20%含む【ピット埋土】
37　10YR7/8 黄橙色シルト【地山】

北調査区　調査区壁断面図



1　【表土】
2　10YR6/8明黄褐色シルト【盛土】
3　10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【盛土】
4　10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～シルト【根カクラン】
5　10YR4/6褐色シルト【盛土】
6　7.5YR4/6褐色シルトに7.5YR4/4褐色極細粒砂～シルトを10%含む【カクラン？】
7　10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを５%含む【ピット】
8　10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルト【ピット上層】
9　８層に酸化した地山ブロックを20%含む【ピット上層】
10　10YR2/3黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを３%含む【ピット中層】
11　10YR5/8黄褐色シルトに10層を10%含む【ピット下層】
12　10YR5/8黄褐色シルト【地山】

南調査区　調査区壁断面図



1　10YR4/2灰黄褐色細粒砂～極細粒砂【表土】
2　10YR4/4～4/6褐色細粒砂～極細粒砂【耕作溝】
3　10YR3/4暗褐色極細粒砂【ピット埋土】
4　10YR4/4褐色極細粒砂【包含層】
5　10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山を粒状に15%含む【浅いピット】
6　10YR3/3暗褐色極細粒砂に地山ブロックを10%含む【浅いピット】
7　10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂【SD10849・10851上層】
8　10YR4/2灰黄褐色極細粒砂【SD10849・10851中層】
9　10YR3/2黒褐色極細粒砂に地山ブロックを３%含む【SD10849・10851下層】
10　10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山を粒状に30%含む【SD10859上層】
11　10YR2/2黒褐色細粒砂～極細粒砂【SD10859上層】
12　10YR3/1黒褐色極細粒砂に地山を粒状に20%含む【SD10859中層】
13　10YR3/1黒褐色極細粒砂に地山を粒状に10%含む【SD10859中層】
14　10YR2/1黒色シルト【SD10859下層】
15　10YR5/8黄褐色シルト【地山】

第Ⅱ－４図　第 186 次調査　土層断面図（1:100）

の南側溝、三つ目は平安時代末葉から鎌倉時代初頭にかけての南北区画道路の東西の道路側溝とそれに伴う波板状凹凸遺構である。その他、道路に関わる可能性のある遺構として、平安時代末葉から鎌倉時代初頭の礫敷遺構もみられた。

道路以外の遺構としては、掘立柱建物４棟、柱列１列、土坑８基などを確認した。遺構の時期幅は奈良時代後葉から鎌倉時代初頭に及ぶ。また掘立柱建物については、第 186 次調査区内ではほとんど確認できず、南東に位置する平成 24 年度の第 178 － 2 次調査区に集中している。第 178 － 2 次調査区については未報告であるが、本調査区の建物の性格を把握するのに欠かせないため、第Ⅱ－３図に平面図のみを第 186 次調査区と合わせて掲載する。

（１）斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－２期の遺構

ＳＢ 10873　南調査区の q5・q6・q7・r5・r6・r7・s5・s6 で確認した桁行３間×梁間２間の掘立柱建物で、北西の柱穴１基以外は第 178 －２次調査により確認している。棟方向は、Ｎ６°Ｗの東西棟となり、梁間および桁行は 1.8 ｍもしくは 2.1 ｍとなる。柱掘方は一辺 0.6 ～ 0.9 ｍの隅丸方形を呈する。出土遺物は、第 186 次調査ではみられなかったが、遺構の時期は第 178 －２次調査の状況から斎宮Ⅰ－４期に該当する。

ＳＢ 10868　南調査区の q4・q5・q6・r4・r5・r6 で確認した桁行４間×梁間２間の掘立柱建物で、南西の柱穴４基以外は第 178 －２次調査により確認している。棟方向は、Ｎ４°Ｗの南北棟となり、梁間および桁行は 1.8 ｍもしくは 2.1 ｍとなる。柱掘方は一辺 0.6 ～ 0.7 ｍの隅丸方形を呈する。出土遺物は、第 186 次調査ではみられなかったが、遺構の時期は第 178 －２次調査の状況から斎宮Ⅱ－１～２期に該当する。

ＳＤ 10852　南調査区の o4・o5 で確認した溝で、平面形は、長さ 2.6 ｍ、幅 1.6 ｍの楕円形を呈し、断面は深さ 0.3 ｍの皿状を呈する。出土遺物は、土師器「奉」あるいは「本」の刻書がある皿（１）、甕Ａ（２）、須恵器杯あるいは蓋（３）があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ－４期に該当すると考えられる。灰釉陶器皿（４）は上層より出土しており、後世の混入品であろう。

ＳＤ 10854　南調査区の o7・o8・o9・p9 で確認した溝で、複数の土坑状の落ち込みが折り重なるようにして溝を形成している。平面形は、長さ 9.8 ｍ、幅 1.4 ｍ前後で、断面は深さ 0.1 ｍ前後と浅く、正確な断面形状は不明である。出土遺物は少なく、図化できたものはなかった。

ＳＤ 10859　南調査区の o11・p11 で確認した溝で、平面形は、長さ 2.8 ｍ以上、幅 2.2 ｍ前後で、特に東側 1.4 ｍ分が深い溝状を呈する。断面は深さ 0.3 ｍの逆台形状を呈する。出土遺物は、土師器杯Ａ（５）、椀Ａ（６・８）・皿Ａ（７）・鉢（９）・甕（10 ～ 12）・鍋？（13）・須恵器杯Ｂ蓋（14）・杯Ａ（15）、壺（16）・盤（17）・平瓶（18）があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に該当すると考えられる。

ＳＤ 10852・ＳＤ 10854・ＳＤ 10859 については、柳原地区で確認されている西辺区画道路の延長線上に該当し、溝群の主軸の角度がＮ４°Ｗとなる。このことから溝群は、下園東区画の西辺区画道路の東側溝を形成すると考えられ、出土遺物の年代から、方格地割造成段階の掘削が想定される。

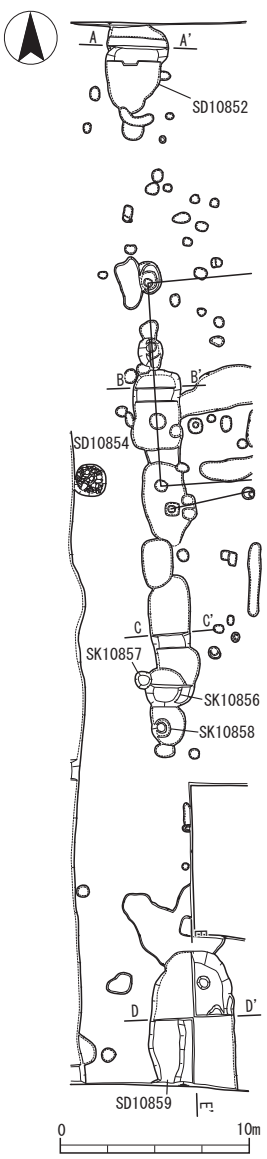
ＳＫ 10856　南側調査区の o9 で確認した土坑で、平面形は、直径 1.0 ｍの正円形を呈し、断面は深さ 0.2 ｍの皿状を呈する。出土遺物は上層から、暗文のある土師器蓋（19）・皿Ａ（23）・杯Ｂ（20）・ドーマン状の記号刻書皿Ａ（21）・皿Ａ（22）・杯Ｇ（24・25）・ドーマン状の記号刻書高杯（26）・甕（27・28）・下層から土師器杯Ｇ（29・30）があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に該当すると考えられる。

ＳＫ 10857　南調査区の o9 で確認した土坑で、平面形は 0.5 ｍ× 0.4 ｍの小型楕円形を呈し、断面は深さ 0.1 ｍの皿状を呈する。遺物はＳＫ 10856 とほぼ同一レベルから出土しており、その埋没後に掘削されている。出土遺物は、土師器杯Ｂ（31）・暗文のある杯Ａ（32）・線刻のある皿Ａ（33）・鍋Ｂ（34）・移動式竈（35）があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に該当すると考えられる。

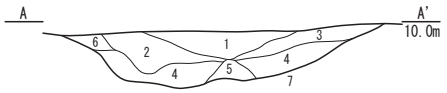
ＳＫ 10858　南側調査区の o9 で確認した土坑で、平面形は直径 0.5 ｍの正円形を呈し、断面は深さ 0.2 ｍの皿状を呈する。出土遺物は、土師器鍋Ａ（36）・須恵器杯Ａ（37）があり、遺構の時期は斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に該当すると考えられる。

ＳＫ 10856・10857・10858 の３基の土坑は、プランやセクションで確認したところ、いずれもＳＤ 10854 の埋没後に掘削されている。それぞれの遺構の前後関係は、ＳＫ 10856 がＳＫ 10857 の埋没後に掘削されたと考えられるが、遺物の出土状況や遺物の年代をみる限り、時期差はほぼ皆無と言える。ＳＫ 10858 は１基だけ他の２基の土坑とは離れており、重複関係より遺構の時期差はみられないが、出土遺物の年代より、３基の土坑は溝の埋没後の間もない時期に掘削されたと考えられよう。なお、３基の土坑から出土した土器には、完形品も含まれており、雑然と廃棄されたような状況ではなかった。特にＳＫ 10856 からは、まじないに使用したと考えら

遺構位置図（１：400）

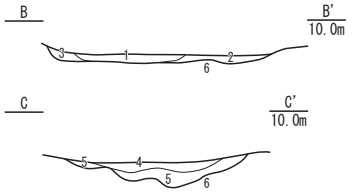


SD10852 土層断面（１：40）



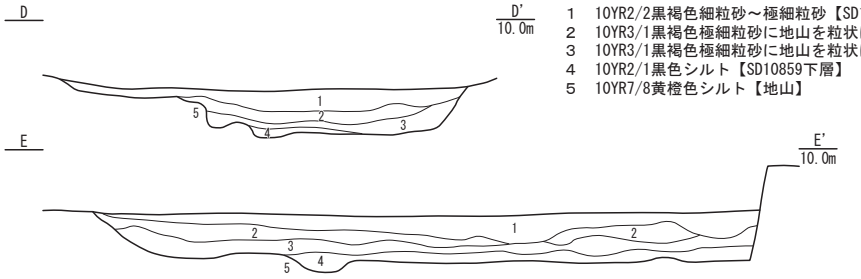
1　10YR3/3暗褐色極細粒砂に地山を粒状に５%含む【SD10852上層】
2　10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに
　地山を粒状に３%、炭化物を含む【SD10852上層】
3　10YR3/3～3/4暗褐色極細粒砂～シルトに
　地山ブロックを20%含む【SD10852上層】
4　10YR4/4～4/6褐色シルトに地山ブロックを30%含む【SD10852下層】
5　10YR4/6褐色シルト【SD10852下層】
6　10YR3/4暗褐色極細粒砂【根カクラン？】
7　10YR5/8黄褐色シルト【地山】

SD10854 土層断面（１：40）



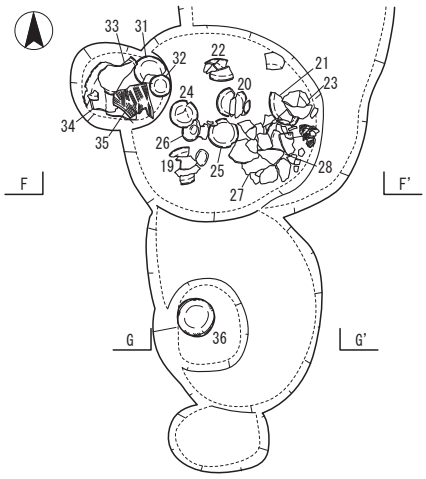
1　10YR2/1黒色極細粒砂【SD10854上層】
2　10YR2/1黒色極細粒砂に
　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロックを20%含む【SD10854下層】
3　10YR5/4にぶい黄褐色シルト【SD10854下層】
4　10YR2/1黒色極細粒砂に炭化物をわずかに含む【SD10854上層】
5　10YR2/2黒褐色極細粒砂に地山ブロックを20%、
　炭化物をわずかに含む【SD10854下層】
6　10YR7/8黄橙色シルト【地山】

SD10859 土層断面（１：40）

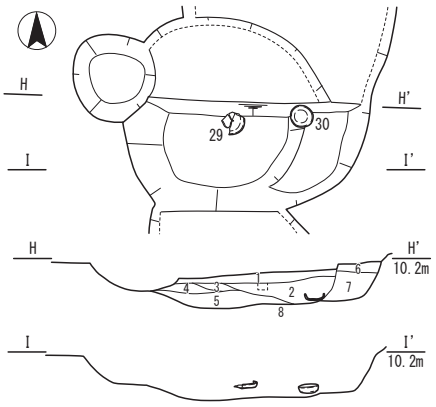


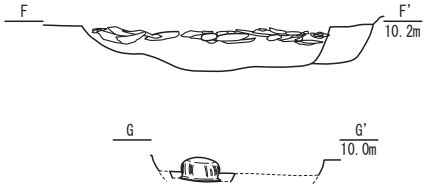
1　10YR2/2黒褐色細粒砂～極細粒砂【SD10859上層】
2　10YR3/1黒褐色極細粒砂に地山を粒状に20%含む【SD10859中層】
3　10YR3/1黒褐色極細粒砂に地山を粒状に10%含む【SD10859下層】
4　10YR2/1黒色シルト【SD10859下層】
5　10YR7/8黄橙色シルト【地山】

SK10856・10857・10858 出土状況（１：40）



SK10856 下層出土状況（１：40）





0　1m

1　10YR3/4暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを
　10%含む【SK10856上層】
2　10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを
　３%、炭化物を含む【SK10856中層】
3　10YR4/4～4/6褐色シルト【SK10856中層】
4　5YR2/4極暗赤褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを
　５%含む【SK10856中層】
5　10YR4/6褐色シルト【SK10856下層】
6　10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを
　20%含む【土坑上層】
7　10YR3/3暗褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを
　30%含む【土坑下層】
8　10YR5/8黄褐色シルト【地山】

第Ⅱ－５図　第 186 次調査　ＳＤ 10852・10854・10859 断面図、ＳＫ 10856・10857・10858 出土状況図・断面図（1:40）

れるドーマン状の記号を刻書した土師器が複数点出土しており、儀式的な所作を想定される。隣接するほぼ同時期のＳＫ 10857・ＳＫ 10858 からは、移動式竈と鍋、甕など、調理に伴う器種も含まれており、儀礼使用後の土器などを一括して廃棄した可能性も考えられる。

（２）斎宮Ⅱ－３～Ⅱ－４期の遺構

ＳＫ 10842　北調査区の m1・m2・n1・n2 で確認した土坑で、平面形は長さ 0.9 ｍ×幅 0.6 ｍの不正楕円形を呈し、断面形状および深さは完掘していないため不明である。出土遺物は混入品である山茶椀（38）もあるが、上層面より土師器杯Ａ（39 ～ 41）・椀Ａ（42）・皿Ａ（43）・甕Ｃ（44）があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ－２～３期に該当すると考えられる。

ＳＫ 10843　北調査区の n1・n2 で確認した大型の土坑で、平面形は長さ 6.2 ｍ×幅 2.8 ｍの不正形を呈し、断面形状は深さ 0.3 ｍの皿状を呈する。出土遺物は杯Ａ（45）、灰釉陶器椀（46）・皿（47）・須恵器甕（48）・土錘（49）があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ－２期に該当すると考えられる。

ＳＫ 10844　北調査区の n3 で確認した土坑で、平面形は長さ 0.7 ×幅 0.6 ｍ以上の正円形を呈し、断面形状および深さは完掘していないため不明である。出土遺物は須恵器杯Ｂ（50･51）･灰釉陶器皿（52）があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ－２期に該当すると考えられる。

ＳＫ 10848　北調査区の n2 で確認した土坑で、平面形は長さ 1.2 ｍ以上×幅 0.8 ｍの楕円形を呈し、断面形状および深さは完掘していないため不明である。出土遺物は土師器椀Ａ（53）があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ－２期に該当すると考えられる。

ＳＢ 10872　南側調査区の q5・q6 で確認した桁行５間×梁間２間の掘立柱建物で、西の柱穴３基以外は第 178 －２次調査により確認している。棟方向は、Ｎ３°Ｗの東西棟となり、梁間および桁行はそれぞれ 1.8 ｍと 2.0 ｍとなる。柱掘方は径 0.3 ｍの楕円形を呈する。出土遺物は、第 186 次調査ではみられなかったが、遺構の時期は第 178 －２次調査の状況から斎宮Ⅱ－３～４期に該当する。

ＳＢ 10853　南調査区の o6・o7・o8・p6・p7・p8・q6・q7 で確認した桁行３間×梁間３間の西面庇付と考えられる掘立柱建物で、東側柱筋は第 178 －２次調査により確認している。棟方向は、西庇と仮定するとＮ４°Ｗの南北棟となり、梁間および桁行は 1.6 ｍ前後、庇の出は 3.0 ｍ前後となる。柱掘方は一辺 0.4 ～ 0.6 ｍの隅丸方形か円形を呈する。出土遺物は、o6 柱穴３から須恵器盤（55）があり、遺構の時期は斎宮Ⅱ－２期以降に該当すると考えられる。また暗文のある土師器皿Ａ（54）は、o6 柱穴ＡがＳＤ 10854 の埋没後に掘削されたため混入したものと考えられる。

（４）斎宮Ⅲ期以降の遺構

ＳＤ 10830　北調査区の l25・m25・n25 で確認した溝で、平面形は、長さ 9.4 ｍ以上、幅 0.5 ｍ以上を呈し、断面は深さ 0.35 ｍの逆台形状を呈すると考えられる。主軸は、北側に道路が位置するため幅員を確認することができなかったことから、正確には不明瞭ではあるものの、概ねＥ３～４°Ｎと考えられ、方格地割の傾きとおおむね一致する。このことからＳＤ 10830 は、下園東区画における北辺区画道路の南側溝であると考えられる。底面の標高は、北西部が 9.35 ｍと低くなるが東側トレンチでは 9.42 ｍとやや高くなる。出土遺物は、灰釉陶器椀（56）、緑釉陶器（57）、平瓦（58）、土錘（59）、温石（60）があり、その他にもロクロ土師器などの細片も見られたため、遺構の時期は斎宮Ⅲ期以降に該当すると考えられる。

ＳＦ 10850 関連遺構

ＳＤ 10831 ～ 10840　北調査区の l1・m1・l2・m2・l3・m3 で確認した溝群で、平面形状や深さに統一感はみられないが、底面の標高が、概ね 9.5 ～ 9.65 ｍとなる。後述する波板状凹凸面ＳＺ 10841 が本溝群と並行して南北に延びていることから、ＳＤ 10849 と同様にＳＦ 10850 西側道路側溝を形成する溝群と考えられる。特にＳＤ 10831 とＳＤ 10832、ＳＤ 10839 とＳＤ 10840 のあり方をみると、北調査区では本来２条の溝が並行していた可能性があり、西側は道路側溝、東側は轍状の溝と考えられる。また、ＳＤ 10846 と同様に南から北に延びるにつれ、西側へ弧状に曲がり、ＳＤ 10830 と交差すると考えられる。出土遺物は少なく、ＳＤ 10836 の土錘（61）のみ図化できた。その他の土師器、灰釉陶器などは、

いずれも細片であった。遺構の時期は、出土した土器や埋土の様相などから、斎宮Ⅲ期以降に該当すると考えられる。

ＳＤ 10846　北調査区の n25・o25・n1・o1 で確認した溝で、ＳＤ 10831 ～ 10840 と同様に南から北に向けて東側へ弧状に曲がる。平面形は長さ 3.3 m以上、幅 1.2 mで、断面は深さ 0.3 mのＵ字形を呈する。ＳＤ 10847・ＳＤ 10851 と同様にＳＦ 10850 の東道路側溝に該当すると考えられ、底面の標高は北端が最も低く 9.33 mとなり、南側ではやや高くなる。出土遺物は、山茶椀やロクロ土師器の細片のほか、須恵器蓋（62）・杯Ｂ（63）・灰釉陶器鉢（64）があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ－１～２期以降に該当すると考えられる。

ＳＤ 10847　北調査区の n1・n2 で確認した溝で、南側をＳＫ 10848 の掘削により失っている。平面形は長さ 2.6 m以上、幅 0.6 mで、断面は深さ 0.2 mの逆台形を呈する。ＳＤ 10846・ＳＤ 10851 と繋がり、ＳＦ 10850 の東道路側溝に該当すると考えられる。底面の高さは 9.45 mとなり、ＳＤ 10846・ＳＤ 10851 と大差ない。出土遺物は、ロクロ土師器台付小皿（65）があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ－１～２期以降に該当すると考えられる。

ＳＤ 10849　南調査区の m8・n8・m9・n9・m10・n10・m11・n11 で確認した溝で、北側も南側も調査区外に続き、南側の第 178 － 2 次調査区内では東側にやや曲がる。平面形は長さ 12.1 m以上、幅 1.2 mで、断面は深さ 0.4 mの逆台形を呈する。ＳＦ 10850 の西側道路側溝に該当する。底面の高さは北から南まで標高 9.55 m前後となる。出土遺物は、陶器の山皿（66）・陶器の山茶椀（67・68）があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ－３～４期前後に該当すると考えられる。

ＳＤ 10851　南側調査区の n5・o5・n6・o6・n7・o7・o8・o9・o10・o11 で確認した溝で、北側も南側も調査区外に続き、南側の第 178 － 2 次調査区内では西側にやや曲がる。平面形は長さ 31.8 m以上、幅 1.0 mで、断面は深さ 0.3 mの逆台形を呈する。ＳＦ 10850 の東側道路側溝に該当する。底面の標高は北から南まで 9.5 ～ 9.6 mで推移する。出土遺物は、青磁椀（69）のほか、陶器の山茶椀やロクロ土師器の細片があり、遺構の時期は、斎宮Ⅲ期以降に該当すると考えられる。

ＳＺ 10841　北調査区の m1・m2・m3・n3 で確認した波板状凹凸面を構成する溝群で、個々の溝の大きさは長さ 0.8 ～ 1.6 m、幅 0.3 m程の長楕円形を呈する。各溝は概ね 0.4 m程の間隔で並び、底面の標高は 9.56 ～ 9.64 mとなる。また各溝の底面には小礫や土器細片などがバラス状に敷かれているものもみられた。先述したとおりＳＤ 10831 ～ 10840 と並行し、南から北へ弧状の平面配置を呈する。そのため、ＳＦ 10850 の道路幅全面に凹凸面は展開せず、西側に偏って、道路側溝ＳＤ 10831 ～ 10840 でも内側の溝群と隣接する。このことからＳＺ 10841 とＳＤ 10831 ～ 10840 は連動する遺構の性格が考えられる。出土遺物はいずれも細片化しているが、灰釉陶器椀（70・71）のみ図化できた。遺構の年代は遺物の年代よりも新しく、斎宮Ⅲ－１～２期以降に該当すると考えられる。

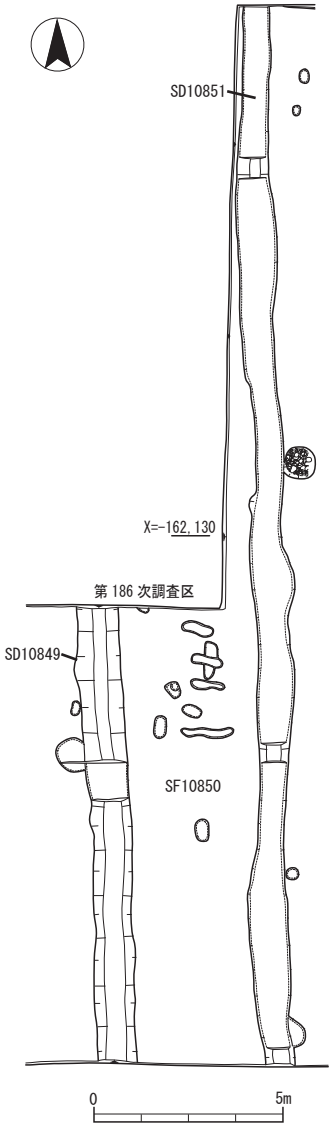
ＳＺ 10845　北調査区の m25・n25・n1・n2 で確認した礫敷遺構で、5cm 以下の小礫から、20cm程の礫など、大小様々の大きさの礫が敷かれている。石材にもまとまりがなく、チャートや砂岩、結晶片岩など種々の川原石を中心に構成されている。平面形は、北側は調査区外へと続くため、全体の形状はわからないが、長さ 8.2 m以上、幅 0.4 ～ 2.2 mと南端で最も狭く、北端で最も広くなる舌状を呈している。ＳＤ 10846 と並行するものの、ＳＤ 10847 とは離れるため、ＳＦ 10850 に伴う性格の遺構であるかは断定できない。出土遺物は土師器杯Ａ（72）・須恵器長頸瓶（73）・円面硯（74）・甕（75）・灰釉陶器椀（76 ～ 81）・瓶（82）・陶器の山茶碗（83・84）があり、遺構の時期は斎宮Ⅲ－３～４期前後に該当すると考えられる。

ＳＫ 10855　南調査区の o7・o8 で確認した集石土坑で、平面形は径 0.8 mの円形を呈し、断面形状は深さ 0.4 mの逆台形を呈する。集石は 5cm～ 20cm程の円礫が主体で、意図的に埋納された状態ではなく、乱雑に置かれており、一部で土器片などを含む。また被熱痕や炭化物の出土はなかった。石材はチャートや砂岩などの川原石で構成されている。出土遺物は上層から土師器甕Ａ（85）・須恵器コップ形鉢（86）が、礫と混在して灰釉陶器椀（87）・ロクロ土師器小皿（88）があり、遺構の時期は斎宮Ⅲ－１～２期

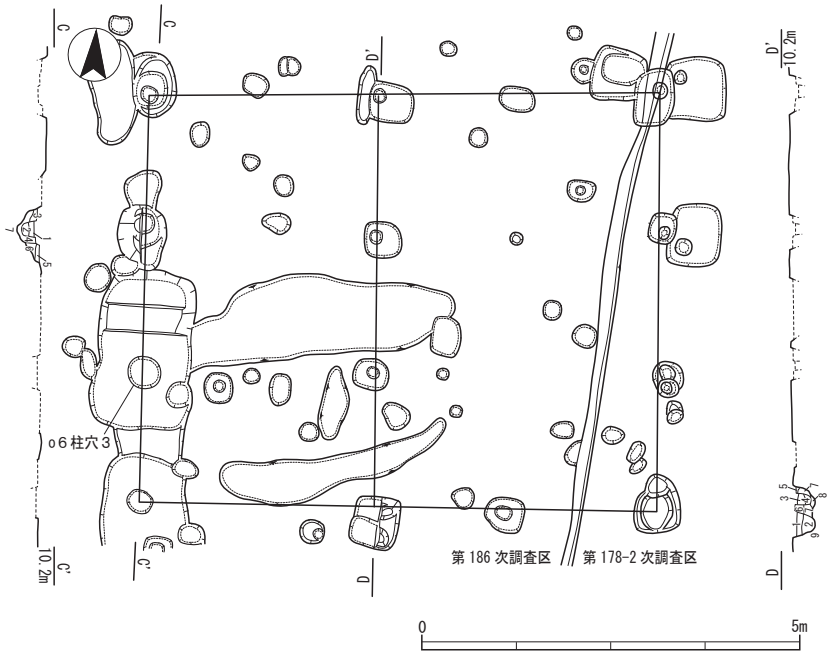
以降に該当すると考えられる。

ＳＡ 10862　南調査区の o8・p8・q7・r7 で確認した柵列で、東側は第 178 － 2 次調査で確認している。柱間は 2.0 m、2.4 m、2.0 m、1.6 m、2.4 mの５間で、方位は E12° N となる。柱掘方は一辺 0.3 ～ 0.6 mの円形や 0.2 mの隅丸方形を呈する。出土遺物は、柱穴から瓦器椀（89）があり、遺構の時期は斎宮Ⅲ期以降に該当すると考えられる。

SF10850 断面図位置図（１：200）



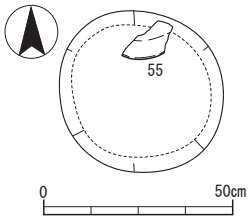
SB10853 平面図・断面図（１：100）



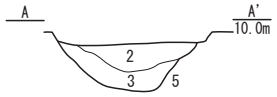
Ｃ－Ｃ´ 間土層注記
1　10YR2/1黒色極細粒砂【o7柱穴５柱痕上層】
2　10YR2/1黒色極細粒砂に
　地山ブロックを10%含む【o7柱穴５柱痕下層】
3　10YR3/2黒褐色極細粒砂に
　地山ブロックを30%含む【o7柱穴５掘方埋土上層】
4　10YR4/4褐色シルト【o7柱穴５掘方埋土下層】
5　10YR1.7/1～2/1黒色極細粒砂～シルト【ピット上層】
6　10YR1.7/1～2/1黒色極細粒砂～シルトに
　地山ブロックを10%含む【ピット下層】
7　10YR5/8黄褐色シルト【地山】

Ｄ－Ｄ´ 間土層注記
1　10YR4/4褐色極細粒砂に10YR2/1黒色シルト、
　地山ブロックを30%含む【ピット埋土上層】
2　10YR3/3暗褐色極細粒砂に10YR2/1黒色シルト、
　地山ブロックを粒状に10%含む【ピット埋土下層】
3　10YR2/2黒褐色極細粒砂に
　地山ブロックを５%含む【o8柱穴４柱痕上層】
4　10YR3/3暗褐色極細粒砂に３層と地山ブロックを
　粒状に10%含む【o8柱穴４柱痕下層】
5　10YR3/2黒褐色極細粒砂【o8柱穴４掘方埋土上層】
6　５層に地山ブロックを30%含む【o8柱穴４掘方埋土上層】
7　５層に地山ブロックを40%含む【o8柱穴４掘方埋土下層】
8　10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂～極細粒砂【根カクラン？】
9　10YR5/8黄褐色シルト【地山】

SB10853 o6 柱穴３出土状況（１：20）

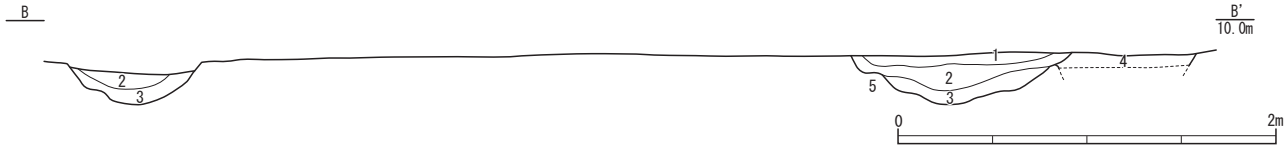


SD10851 断面図（１：40）

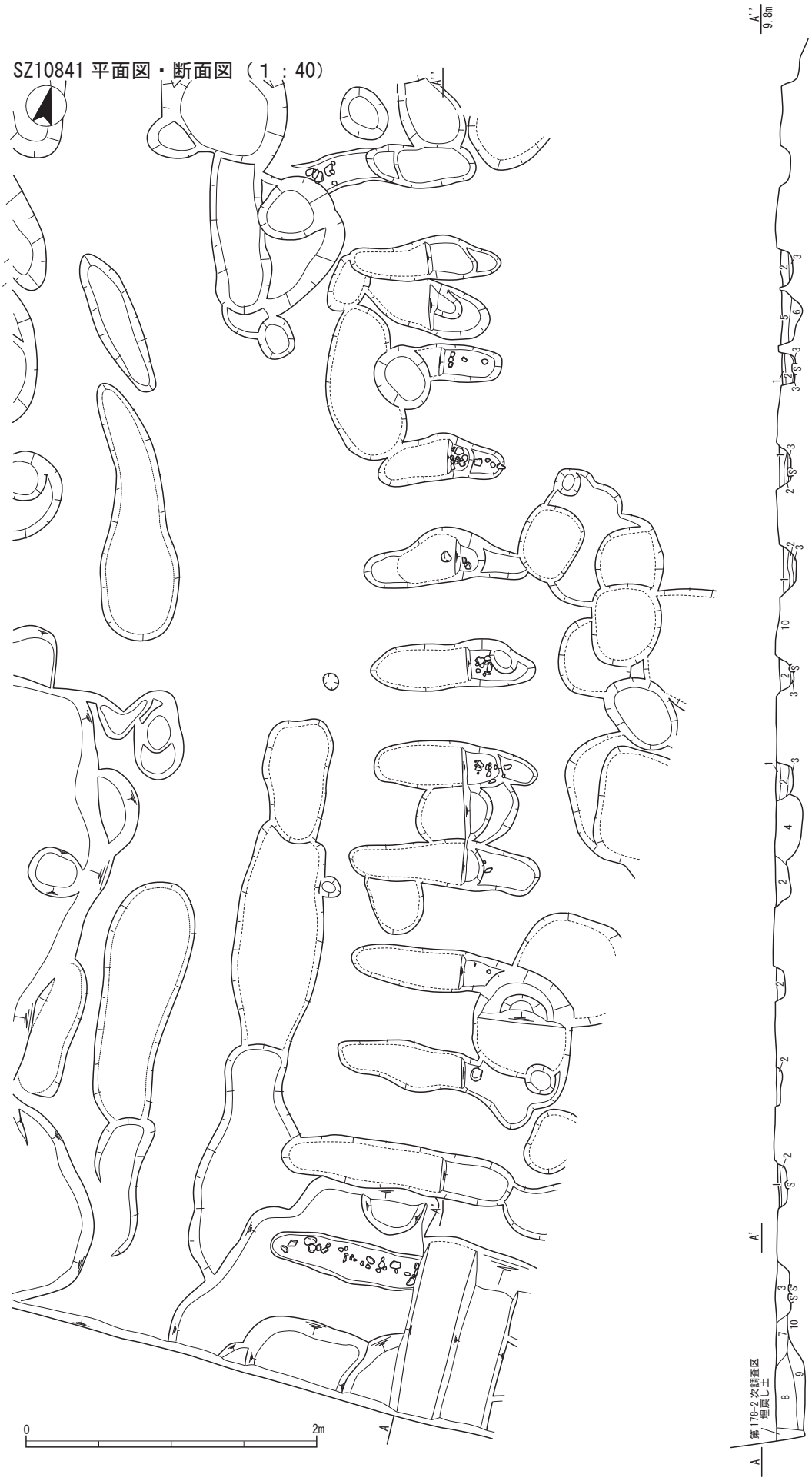


SD10849・SD10851土層注記
1　10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂【上層】
2　10YR4/2灰黄褐色極細粒砂【中層】
3　10YR3/2黒褐色極細粒砂に地山ブロックを３%含む【下層】
4　10YR2/2黒褐色極細粒砂～シルトに地山ブロックを20%含む【土坑埋土】
5　10YR5/8黄褐色シルト【地山】

SD10849・SD10851 断面図（１：40）



第Ⅱ－６図　第 186 次調査　ＳＢ 10853 平面図・断面図（1:100）、出土状況図（1:20）、ＳＤ 10849・10851（ＳＦ 10850）断面図（1:40）

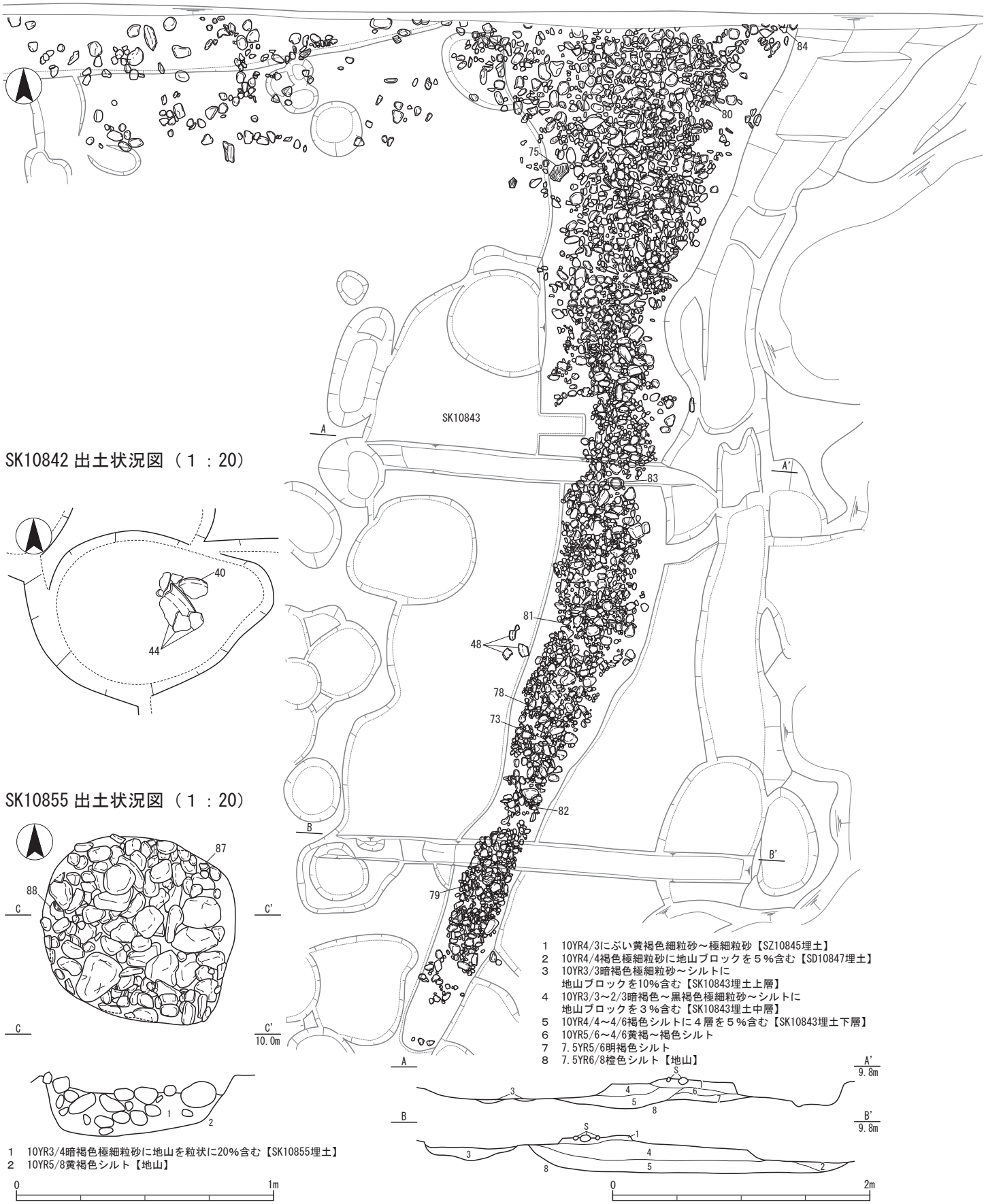


第Ⅱ－７図　第186次調査　ＳＺ10841平面図・断面図（1:40）

SZ10845 平面図・断面図（１：40）

SK10842 出土状況図（１：20）

SK10855 出土状況図（１：20）



第Ⅱ－８図　第186次調査　ＳＺ10845平面図・断面図（1:40）、ＳＫ10842・10855出土状況図・断面図（1:20）

遺構名	調査時遺構名		ピット番号 ※( )はグリッド番号	時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法 (m)	主軸	方位 (N規準)	備考
SA 10862	178－2次 186次	― 柱列1	(r7)p2/(q8)p2/(p8)p1	Ⅲ以降	4～5(10.8)	2.1	東西	N14° W	
SB 10853	186次	建物1	(o6)柱穴3/(p6)p1/(q7)柱穴3,柱穴5/(p8)柱穴4	Ⅱ-2以降	3(5.1)×3(6.6)	(桁行) 1.7 (梁間) 1.8 (庇出) 3.0	南北	N3° W	西庇
SB 10868	178－2次 186次	建物5 建物2	(q4)p7,p8/(r4)p4/(q5)p4,柱穴1,(r5)p19,p16/(q6)p2,柱穴2/(r6)p3,p12	Ⅱ-1～2	4(7.6)×2(3.5)	(桁行) 1.9 (梁間) 1.75	東西	N4° W	
SB 10872	178－2次 186次	建物11 建物3	(q5)p1,p3,p6/(r5)p17,p21/(s5)p8,p17/(r6)p9/(s6)p2,p	Ⅱ-3～4	5(9.0)×2(3.7)	(桁行) 1.8 (梁間) 1.85	東西	N3° W	
SB 10873	178－2次 186次	建物4	(q6)p4,p5/(r6)p1,p3,p6,p14/(q7)p1/(r7)p1	Ⅰ-4	3(5.9)×2(3.8)	(桁行) 1.95 (梁間) 1.9	東西	N6° W	

第Ⅱ－１表　第 186 次調査　掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名		グリッド	時期	出土遺物	備考
SD 10830	186次	溝1	l25～n25	Ⅲ以降	土師器、須恵器、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、土錘、平瓦、温石	北辺道路南側側溝 SX10845に切られる
SD 10831	186次	溝27	l1	Ⅲ以降	なし	南北道路側溝
SD 10832	186次	溝28	l1	Ⅲ以降	なし	
SD 10833	186次	溝29	l1	Ⅲ以降	なし	
SD 10834	186次	溝11	l1	Ⅲ以降	土師器	
SD 10835	186次	溝30	l1	Ⅲ以降	なし	
SD 10836	186次	溝4	m2	Ⅲ以降	土師器、土錘	
SD 10837	186次	溝9	l2	Ⅲ以降	土師器	
SD 10838	186次	溝32	m2	Ⅲ以降	なし	
SD 10839	186次	溝15	m3	Ⅲ以降	土師器	
SD 10840	186次	溝13	m3	Ⅲ以降	土師器、須恵器、灰釉陶器	
SZ 10841	186次	溝5他	m1～n3	Ⅲ以降	灰釉陶器小椀	波板状凹凸面
SK 10842	186次	土坑2	m1～m2	Ⅱ-2～3	土師器杯・皿・甕、上層より山茶椀	
SK 10843	186次	土坑4	n1～n2	Ⅱ-2	土師器杯・皿、須恵器甕、灰釉陶器椀、土錘	SX10845に切られる
SK 10844	186次	土坑8	n3	Ⅱ-2	須恵器台付鉢、灰釉陶器皿、白磁椀	
SZ 10845	186次	礫敷	n25～n2	Ⅲ-3以降	土師器杯、須恵器長頸壺・平底鉢・円面硯、灰釉陶器椀・壺、山茶椀	
SD 10846	186次	溝2	o25～n2	Ⅲ以降	須恵器盤・台付鉢、山茶椀大鉢	SD10847・SD10851と一連の溝か?
SD 10847	186次	溝3	n1～n2	Ⅲ以降	ロクロ土師器台付小皿	SD10846・SD10851と一連の溝か?
SZ 10848	186次	土坑3	n2	Ⅱ-2	土師器杯	
SD 10849	178-2次 186次	溝25	n9～n11	Ⅲ-3以降	土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀	
SF 10850	186次	道路1	l25～o11	Ⅲ以降	なし	
SD 10851	178-2次 186次	溝1 溝21	n5～o11	Ⅲ以降	土師器、ロクロ土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶椀、青磁	SD10846・SD10847と一連の溝か?
SD 10852	186次	土坑10	o4～o5	Ⅰ-4	刻書土師器皿、土師器皿・甕、須恵器杯、灰釉陶器小皿	SD10854・10859と一連の溝か?
SB 10853	186次	建物1	o6～p8	Ⅱ-2以降	o6柱穴3土師器皿、須恵器皿	SD10854・SB10872・10873を切る SA10862に切られる
SD 10854	186次	溝24	o7～p9	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器鍋	SD10852・10859と一連の溝か?
SK 10855	186次	土坑12	o7～o8	Ⅲ以降	土師器甕、ロクロ土師器小皿、須恵器鉢・蓋、山茶椀	
SK 10856	186次	土坑16	o9	Ⅰ-4～Ⅱ-1	刻書土師器高杯・皿、土師器杯・台付杯・蓋・皿・鉢・甕	SK10857に切られる
SK 10857	186次	土坑14	o9	Ⅰ-4～Ⅱ-1	刻書土師器皿、土師器杯・台付杯・鍋・竈	SK10856を切る
SK 10858	186次	土坑19	o9	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器甕、須恵器	
SD 10859	186次	土坑20	o11～p11	Ⅰ-4～Ⅱ-1	土師器杯・椀・皿・鉢・甕・甑、須恵器杯・蓋・壺・瓶	SD10852・10854と一連の溝か?
SA 10862	186次	柱列1	r7～p8	Ⅲ以降		SB10853を切る
SB 10868	178-2次 186次	建物5 建物2	q4～r6	Ⅱ-1～2	(r6P12)土師器皿、須恵器蓋	SB10870を切る SB10866に切られる
SB 10872	178-2次 186次	建物11 建物3	q5～s6	Ⅱ-3～4	(r5P17)土師器鉢、灰釉陶器椀、(s5P9)土師器台付杯	
SB 10873	178-2次 186次	建物4	q5～s6	Ⅰ-4	(r6P1)土師器甕、(r7P1)須恵器盤	SB10853に切られる

第Ⅱ－２表　第 186 次調査　遺構一覧表

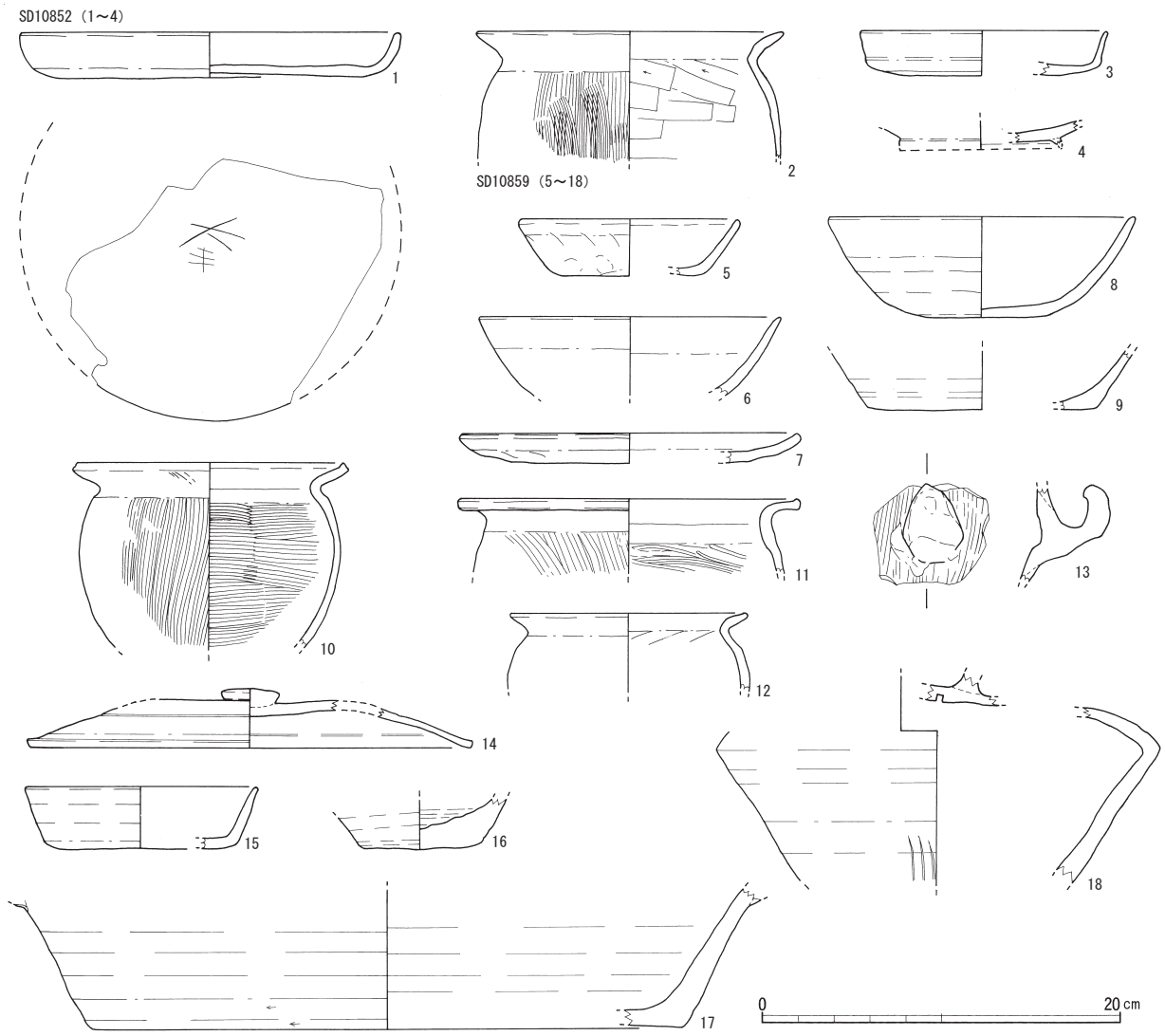
４　遺物

遺物はコンテナバット36箱分が出土した。

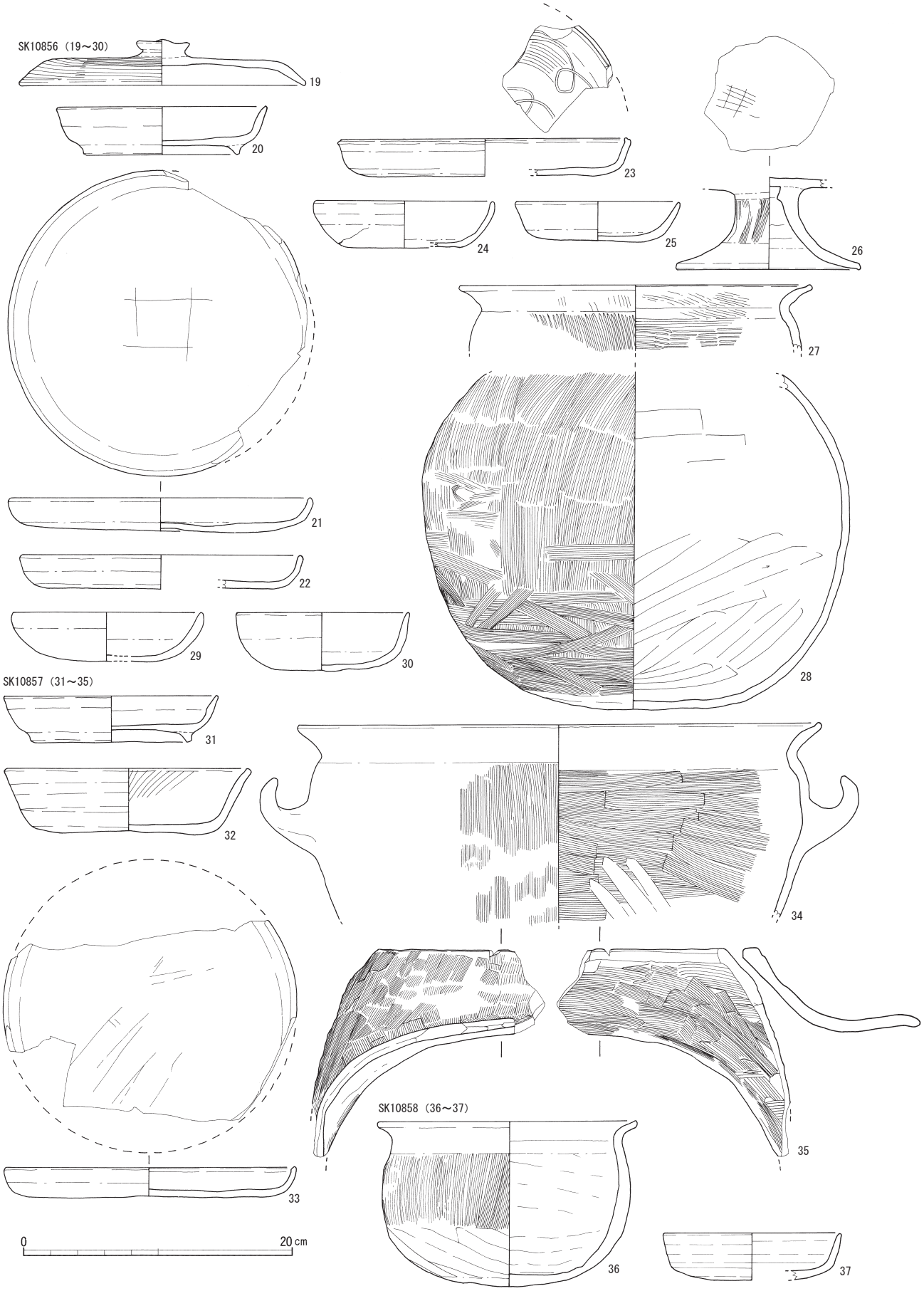
（１）斎宮Ⅱ－２期以前の遺構出土遺物

ＳＤ10852出土遺物（１～４）（1）は刻書のある土師器皿である。平坦な底部に「奉」あるいは「本」の文字が刻まれている。類似する資料は西加座南区画に３例が集中しており、第83次調査で刻書土師器、第86次調査で墨書須恵器、第156次調査で墨書土師器がいずれも異なる土坑から出土している。神殿地区と考えられる西加座南区画の性質を反映している文字の可能性もあり今後注意が必要であろう。（２）は土師器甕Ａで、口縁部はやや厚手で、端部は面をもたない。胴部は大部分が失われているものの球状を呈さない。（３）は須恵器杯Ａあるいは蓋で、口縁部はわずかに外反する。以上は、斎宮Ⅰ－４期に属する。（４）は灰釉陶器皿で、上層からの出土のため、混入品と考えられる。

ＳＤ10859出土遺物（５～18）（５）は土師器杯Ａで口縁部は外傾し、端部を丸く収める。（６・８）は土師器椀Ａで口縁部はやや内湾し、端部を丸く収める。底部は平坦である。（７）は土師器皿Ａで口縁部は強く外傾し、立ち上がりが小さい。（９）は土師器鉢の底部と考えられ、底部は明確な稜線を持ち形成されている。（10～12）は土師器甕で、（10）の口縁部はやや内湾し、端部に面を持つ。胴部は球状を呈す。（11）の口縁部は水平となるほど強く外反し、端部を肥厚させる。胴部はを失っているものの、球状を呈さない。（12）はやや小型の甕で、やや厚手の短い口縁部が外傾し、端部を丸く収める。



第Ⅱ－９図　第186次調査　出土遺物実測図１（1:4）



第Ⅱ-10図　第186次調査　出土遺物実測図２（1:4）

胴部は球状を呈す。(13) は土師器鍋もしくは甑の把手で、胴部との接合は丁寧にナデつけている。(14) は須恵器杯Ｂに伴う蓋で、頂部には宝珠ツマミを持つ。外面に一条の沈線を有し、口縁端部がわずか肥厚および外反する。(15) は須恵器杯Ａで、口縁部はわずかに外傾する。(16) は須恵器壺の底部と考えられる。(17) は須恵器盤で、胴部に把手が取りつくと考えられる膨らみが残存する。(18) は平瓶で、肩部に把手と考えられる突起を有する。いずれも斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に属する。

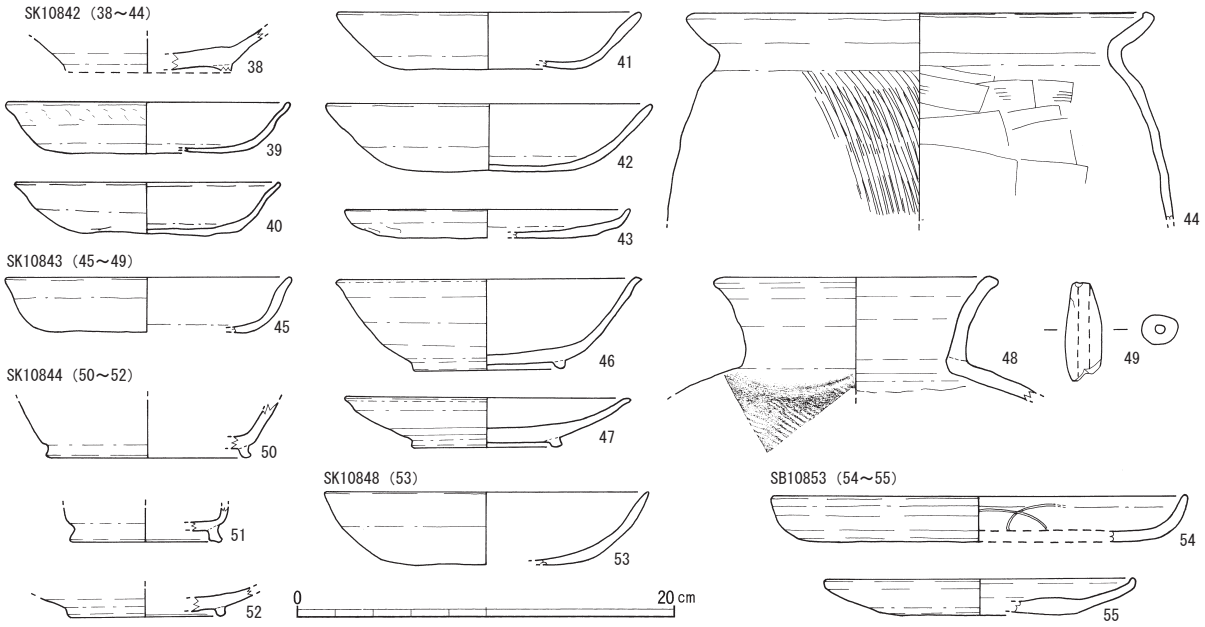
ＳＫ 10856 出土遺物（19 ～ 30） (19) は土師器蓋で、頂部には宝珠ツマミを持つ。(20) は土師器杯Ｂで、口縁部はわずかに外反する。高台は逆台形を呈す。(21) は刻書土師器皿Ａで、かなり磨滅しているものの、見込み面にドーマン状の記号が刻まれている。(22) は土師器皿Ａで、口縁部がやや外傾し、端部を丸く収める。(23) は暗文のある土師器皿Ａで、内面に螺旋状の暗文が施されている。口縁部は外傾し、端部には一条の段差がめぐる。(24・25) は土師器杯Ｇで、(24) は口縁部がわずかに内傾し、端部を丸く収める。(25) は口縁部が外傾し、端部がわずかに外反する。(26) は刻書土師器高杯で、杯部見込み面にドーマン状の記号が刻まれている。(27･28) は土師器甕で、(27) は口縁部が外傾し、端部を丸く肥厚させる。(28) は胴部のみであるが、球状を呈する。(29・30) は下層から出土した土師器杯Ｇで、口縁部から底部にかけては丸く成形されており、在来系の土師器の特徴を色濃く有している。上層、下層ともに斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に属する。

ＳＫ 10857 出土遺物（31 ～ 35） (31) は土師器杯Ｂで、口縁部は外傾し内面がわずかに肥厚する。高台は逆台形を呈する。(32) は暗文のある土師器杯Ａで、磨滅しているものの内面口縁部に放射状の暗文が残る。器高がやや高く、口縁部はゆるやかに外傾する。(33) は刻書のある土師器皿Ａで、磨滅により底部に刻まれた線刻はほぼ失われている。(34) は土師器鍋Ｂで、口縁部は外傾し、端部内面はなでにより凹む。胴部内外面にはハケ目がみられる。(35) は土師器移動式竈で、内外面にハケ目がみられるが、焚口部および口縁部はナデ消されている。いずれも斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に属する。

ＳＫ 10858 出土遺物（36 ～ 37） (36) は土師器鍋Ａで、口縁部は短く外傾する。(37) は須恵器杯Ａで、口縁部はわずかに外傾する。いずれも斎宮Ⅰ－４～Ⅱ－１期に属する。

（２）斎宮Ⅱ－２～Ⅱ－４期の遺構出土遺物

ＳＫ 10842 出土遺物（38 ～ 44） (38) は陶器の山茶椀で、高台端部を欠損しているものの、低い高台を有する。上層部から出土したことと、その他の遺物の時期から混入品と考えられる。(39 ～ 41) は土



第Ⅱ -11 図　第 186 次調査　出土遺物実測図３（1:4）

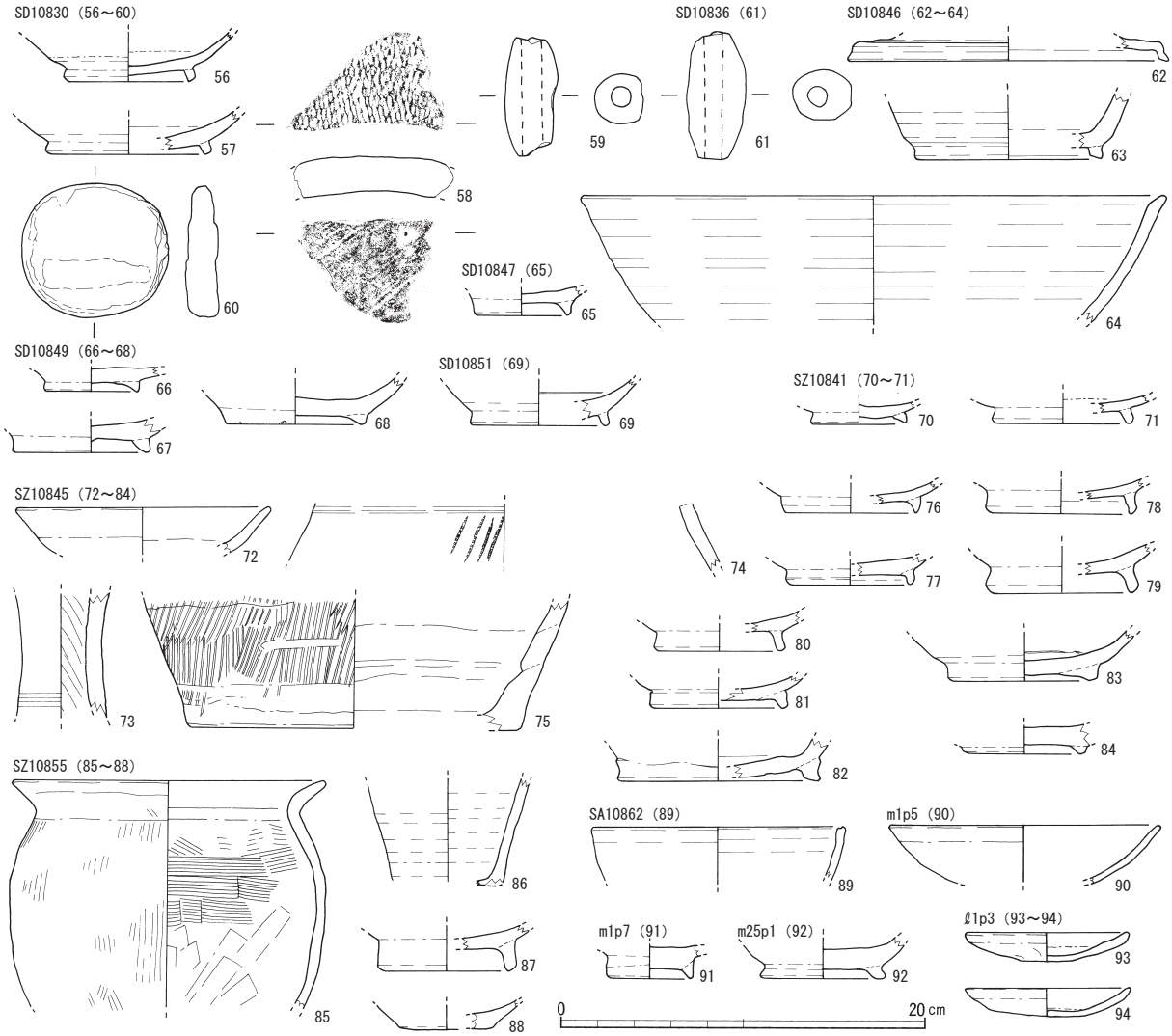
師器杯Ａで、(39･40) は口縁部がわずかに外反する。(41) は口縁部が外傾し、端部はわずかに肥厚する。(42) は土師器杯Ａで、口縁部が外傾する。(43) は土師器皿Ａで、器高が低く、口縁端部をヨコナデし、外面に面をもつ。(44) は土師器甕Ｃで、口縁部をヨコナデし外面に面をもつ。口縁端部が内面に肥厚する。いずれも斎宮Ⅱ－２～３期に属する。

ＳＫ 10843 出土遺物（45 ～ 49） (45) は土師器杯Ａで、口縁部がわずかに外反する。(46) は灰釉陶器椀で、口縁端部が外反し、やや丸みのある逆台形の高台をもつ。(47) は灰釉陶器皿で、口縁端部がわずかに外反し、逆台形で外開きの高台をもつ。(48) は須恵器の甕で、外面に平行タタキを施す。(49) は管状土錘である。いずれも斎宮Ⅱ－２期に属する。

ＳＫ 10844 出土遺物（50 ～ 52） (50・51) は須恵器杯Ｂで、(50) は口縁部に向けてやや外傾する。高台はやや外反する。(51) は小型で、口縁部に向けて直立する。高台は外反し、底面がナデにより凹む。(52) は灰釉陶器皿で、高台はやや丸みを帯びている。(50・51) はやや古く感じるが、概ね斎宮Ⅱ－２期に属する。

ＳＫ 10848 出土遺物（53） (53) は土師器椀Ａで、口縁部はわずかに内湾する。斎宮Ⅱ－２期に属する。

ＳＢ 10853 出土遺物（54 ～ 55） (54) は暗文のある土師器皿Ａで、内面に螺旋状の暗文が施されている。柱穴の上層より出土し、周囲にはⅠ－４期に遡ると考えられるＳＤ 10854 が位置しており、他の遺物の状況も考えると混入品の可能性が高い。(55)



第Ⅱ -12 図　第 186 次調査　出土遺物実測図４（1:4）

は焼成のあまい須恵器盤で、口縁部がわずかに内湾し、底部が平坦となる。蓋の可能性も考えられる。斎宮Ⅱ－２期以降と考えられる。

（３）斎宮Ⅲ期以降の遺構出土遺物

ＳＤ 10830 出土遺物（56 ～ 60）（56）は灰釉陶器椀で、丸みを帯びた三日月高台を有する。(57）は緑釉陶器椀で、見込み面にトチン跡が残る。(58）は平瓦で､磨滅が著しいものの凸面には縄目タタキ、凹面には布目痕が明瞭に残る。(59)は管状土錘､(60）は温石と考えられる円形に加工した片岩質の石製品である。図化した土器は斎宮Ⅱ－４期以前まで遡るが、遺構の時期はⅢ期以降と考えられる。

ＳＤ 10836 出土遺物（61）（61）は管状土錘で、時期は不明である。

ＳＤ 10846 出土遺物（62 ～ 64）（62）は須恵器の杯Ｂに伴う蓋で、口縁端部内面に面を持つ。(63）は須恵器杯Ｂで高台はやや内傾する逆台形を呈する。(64）は灰釉陶器の鉢で、体部が緩やかに内湾する。端部外面はわずかに外反し、端部内面には面をもつ。須恵器は斎宮Ⅰ期まで遡る資料であるが、上層出土のため混入と考えられる。灰釉陶器は斎宮Ⅲ－１～２期に属し、こちらが遺構の時期を示している遺物であろう。

ＳＤ 10847 出土遺物（65）（65）はロクロ土師器台付小皿で高台は三角形を呈する。斎宮Ⅲ－１～２期に属する。

ＳＤ 10849 出土遺物（66 ～ 68）（66）は陶器山皿、(67・68）は陶器山茶椀である。(68）は遺構最下層から出土し､斎宮Ⅲ－３～４期に属するとみられる。

ＳＤ 10851 出土遺物（69）（69）は越州窯系の青磁椀である。

ＳＺ 10841 出土遺物（70・71）（70）は灰釉陶器小椀で、三角高台をもつ。(71）は灰釉陶器椀である。斎宮Ⅲ－１～２期に属する。

ＳＺ 10845 出土遺物(72 ～ 84）（72)は土師器杯で、口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収める。(73）は須恵器長頸瓶などの頸部である。(74）は須恵器円面硯の脚部で、外面には櫛状工具による刺突が施されている。(75）は須恵器甕の底部で、内面は丁寧にナデる。(76 ～ 81）は灰釉陶器椀、(82）は灰釉陶器瓶の底部である。(83・84）は陶器山茶椀で、斎宮Ⅲ－３～４期に属する。その他の遺物は礫とともに混入した遺物であろう。

ＳＫ 10855 出土遺物（85 ～ 88）（85）は土師器甕Ａで、口縁部は外傾し、端部を丸く収める。(86）は須恵器小型鉢で、どちらも上層からの出土であり混入品であろう。(87）は灰釉陶器椀で、ずんぐりとした三日月高台を有す。(88）はロクロ土師器小皿で、斎宮Ⅲ－１～２期に属する。

ＳＡ 10862 出土遺物（89）（89）は瓦器椀の口縁部で、わずかに内湾し、端部に面をもつ。斎宮Ⅲ期以降に属する。

ピット出土遺物

ｍ１ｐ５出土遺物（90）（90）は土師器杯で、口縁部は外傾し、端部は角張る。斎宮Ⅱ－４～Ⅲ－１期に属する。

ｍ１ｐ７出土遺物（91）（91）はロクロ土師器台付杯で、斎宮Ⅲ－２期に属する。

m25p１出土遺物（92）（92）は陶器山茶椀で、斎宮Ⅲ－３～４期に属する。

ｌ１ｐ３出土遺物（93・94）（93・94）は土師器小皿で、斎宮Ⅲ期に属する。

（４）包含層・表土出土遺物

包含層出土遺物（95 ～ 110）（95）はロクロ土師器小皿の台部。(96）は灰釉陶器椀で、外反する角高台を有する。(97・99）は灰釉陶器瓶で、(98）は灰釉陶器小瓶である。(100・101）は灰釉陶器鉢で、細い三角高台と外反する角高台をもつ。(102）は青磁椀､(103 ～ 106）は白磁椀､(107）は白磁皿､(108）は青白磁合子蓋である。(109）は管状土錘、(110）は石器未製品で、石材は黒色チャートである。

表土出土遺物（111 ～ 121）（111）は土馬の尻尾部で、脚部の剥離箇所には棒状の有機質を差し込んだ痕跡がみられる。斎宮Ⅰ期にまで遡る。(112）は土師器杯、(113）は土師器高杯脚部、(114）灰釉陶器椀、(115･116）は緑釉陶器椀、(117）は陶器山皿で、見込み面に漆が付着している。(118･119)は白磁椀、(120）は管状土錘である。その他、カクランより近世陶磁器の三足香炉が出土している。

5　まとめ

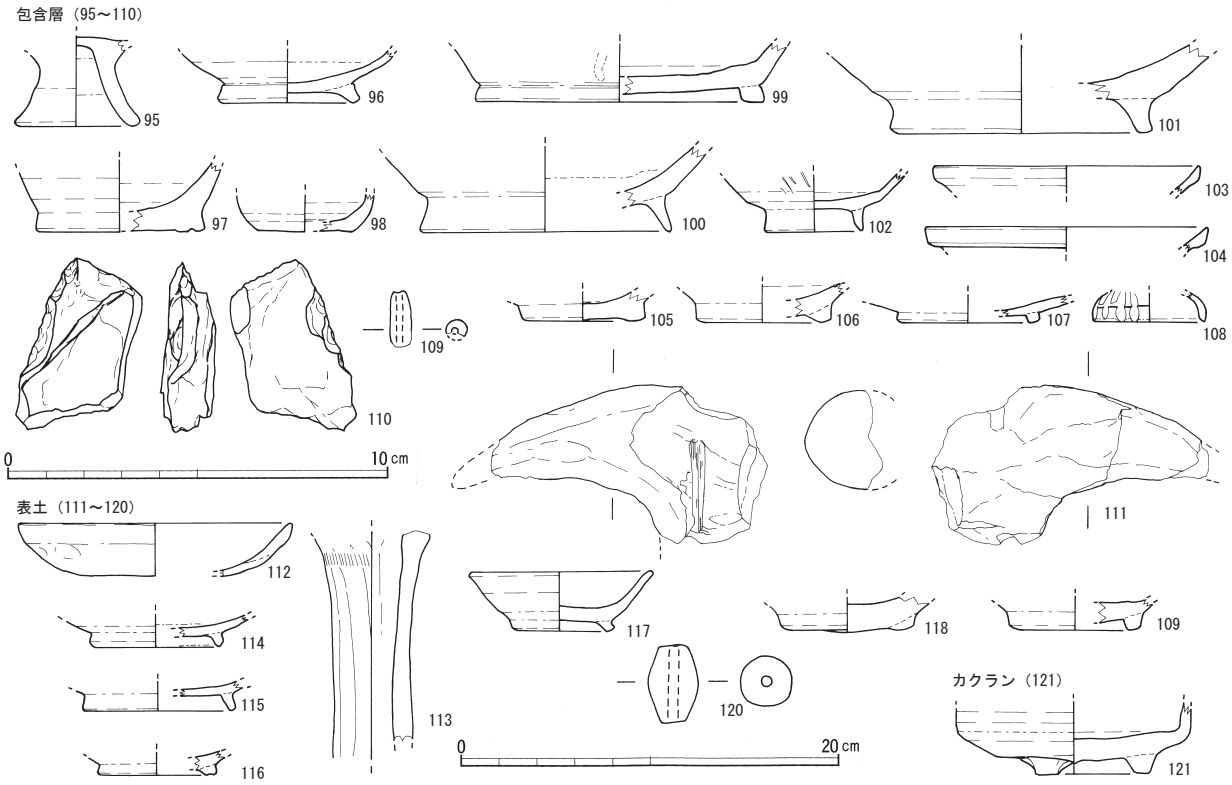
今回の調査は、下園東区画の北西隅部と下園西区画との境界における区画道路の実態解明を目的として実施した。

（1）区画道路の変遷について

下園東区画の西端部ではこれまで、第47次や第178－2次調査が行われているが、調査範囲が狭く、確実に区画道路に伴う道路側溝の確認には至っていなかった。しかし、今回の調査区において確認できたＳＤ10852･10854･10859は遺構深度の差異によって、部分的に失われてはいるものの、出土遺物の年代から、方格地割造成当初の下園東区画の西辺区画道路の東側溝の一部と考えられよう。こうした南北区画道路側溝の脆弱な状況は、柳原区画の西辺道路側溝等でも確認されており[1]、柳原から下園東区画へと一連に繋がる西辺道路側溝の機能的な性格を表している可能性がある。また、ＳＤ10859埋没後に重複して掘削されたＳＫ10956・10857・10858から出土した土器群は、ＳＤ10859の示す年代から大きく乖離するものではなく、年代差はほぼないものと考えられることから、ＳＤ10859が埋没して道路側溝としての機能を失うまでは極めて短期間であったことが想定できる。

次に平安時代末葉以降の造成となるＳＦ10850とその道路側溝群は、側溝間の幅が、交差点付近の最大幅で約14ｍであるが、最小幅は南端部の約３ｍと、方格地割造成時の道路計画幅約15ｍよりもかなり狭く変質している。そして、交差点部には人や牛馬の往来を示すものと考えられる[2]波板状凹凸面（ＳＺ10841）がみられ、側溝は排水機能を有する深度を有することから、実用性を重視した道路として機能したことが想定される。

以上から、下園東区画西辺道路、特に東側道路側溝は、造成時からあまり時を経ずして機能を失っていた可能性があり、その後は平安時代末葉以降に実用性の高い道路として再敷設された変遷をたどることが明らかとなった。



第Ⅱ-13図　第186次調査　出土遺物実測図５（110のみ1:2、1:4）

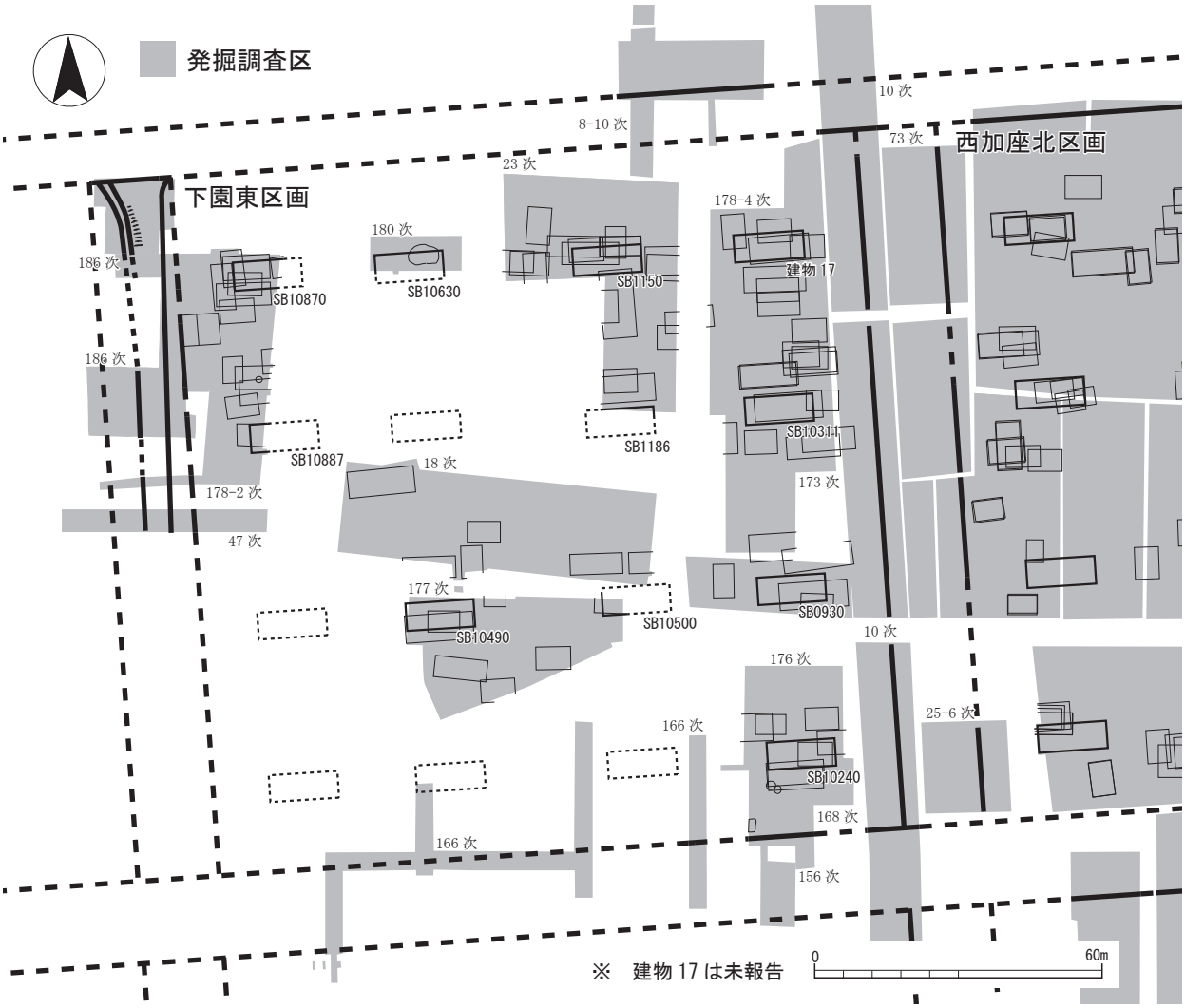
（２）波板状凹凸面と礫敷遺構について

波板状凹凸面（ＳＺ 10841）は、西辺道路面に約 0.4 ｍの間隔で小溝群が道路軸と直交、西側道路側溝となる溝群と湾曲しながら並行する。対して礫敷遺構（ＳＺ 10845）は道路中央部から東側側溝と並行して湾曲し、調査区外へと幅を広げながら続く。過去に史跡内では、第３次調査のＳＤ 4500 や第 37 － 4 次調査のＳＦ 2427 で波板状凹凸面が確認されており、特にＳＦ 2427 では、十字状交差点に凹凸面が形成され、その直上に礫敷遺構が確認されている。このような前例から、今回確認したＳＺ 10841 およびＳＺ 10845 は同一道路面に形成された類似した性格の遺構である可能性が浮上してくる。またこの周囲は、南側の調査区と比較して、標高が低く、水はけが著しく悪い。こうした箇所に部分的に礫敷を施すことで、泥濘による牛馬歩行の障害を取り除く工夫が施された可能性が考えられよう。

註

（１）大川勝宏 2014「柳原区画の遺構」『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ』柳原区画の調査 遺構・遺構総括編　斎宮歴史博物館

（２）川部浩司 2012「波板状凹凸面からみた伊勢地域の道路遺構」『Mie history』Vol.21 三重歴史文化研究会



第Ⅱ -14 図　下園東区画の調査成果（1:1500）

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	土師器	皿	SD10852	口径 器高	20.8 2.5	外面:ヨコナデ・ヘラケズリ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙2.5YR6/8	口縁部 2/12	底部に刻書「奉」か？	019-01
2	土師器	甕A	SD10852	口径 残高	16.9 7.1	外面:ハケ・ヨコナデ 内面:ヘラケズリ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 2/12		003-03
3	須恵器	杯	SD10852 上層	口径 器高	13.5 2.5	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5YR6/2	口縁部 3/12	蓋か？	003-01
4	灰釉陶器	皿	SD10852 上層	底径 残高	8.9 1.3	外面:糸切・貼付高台・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:灰黄2.5Y7/2	底部1/12	混入品	003-02
5	土師器	杯A	SD10859 上層	口径 器高	12.0 3.2	外面:ヨコナデ・オサエ・ヘラナデ・工具痕、内面:ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 5/12		007-05
6	土師器	椀A	SD10859 上層	口径 残高	16.6 4.4	外面:オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 2/12		007-04
7	土師器	皿A	SD10859 上層	口径 器高	18.4 1.7	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12		009-03
8	土師器	椀A	SD10859 上層	口径 器高	16.8 5.6	外面:ヘラケズリ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 3/12	椀A大形品	011-02
9	土師器	鉢	SD10859 上層	底径 残高	12.6 3.3	外面:ヘラケズリ 内面:ナデ	密	良	橙2.5YR6/8	底部1/12		011-06
10	土師器	甕A	SD10859 上層	口径 残高	14.7 10.3	外面:ハケ・ヨコナデ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12		009-05
11	土師器	甕A	SD10859	口径 残高	18.6 4.2	外面:ハケ・ヨコナデ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 1/12		011-01
12	土師器	甕A	SD10859	口径 残高	13.0 4.4	外面:ヨコナデ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 2/12	マメツ	010-04
13	土師器	鍋？	SD10859 上層	残高	5.4	外面:ハケ・把手貼付・オサエ・ナデ 内面:ハケ・オサエ・ヘラケズリ	密	良	灰黄褐10YR6/2	把手のみ	鍋か甑？	009-04
14	須恵器	杯B蓋	SD10859 上層	口径 残高	24.4 2.2	外面:ツマミ貼付・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5YR6/2	口縁部 1/12		011-03・04
15	須恵器	杯A	SD10859 上層	口径 器高	12.7 3.5	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	不良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12	生焼け	011-05
16	須恵器	壺	SD10859 上層	底径 残高	6.4 2.8	外面:ロクロケズリ・ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5YR5/1	底部完形		009-02
17	須恵器	盤	SD10859 上層	底径 残高	32.7 7.8	外面:把手貼付・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部1/12		010-01
18	須恵器	平瓶	SD10859 上層	肩径 残高	24.6 9.8	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい黄2.5YR6/3	肩部4/12		010-02・03
19	土師器	蓋	SK10856 No.1	口径 器高	20.9 3.4	外面:ツマミ貼付・ケズリ・ミガキ・ヨコナデ 内面:ミガキ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 4/12		007-02
20	土師器	杯B	SK10856 No.6	口径 器高	15.3 3.6	外面:貼付高台・ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 8/12		005-02
21	土師器	皿A	SK10856 No.11	口径 器高	22.1 2.6	外面:ヘラケズリ・ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・オサエ・ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 7/12	見込み面にドーマン状記号の刻書	020-01
22	土師器	皿A	SK10856 No.5	口径 器高	20.5 2.5	外面:ヘラケズリ・ヘラナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 2/12		005-03
23	土師器	皿A	SK10856 No.11	口径 器高	21.0 2.8	外面:ヘラケズリ・ヘラナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ミガキ・螺旋状暗文2条	密	良	橙5YR7/6	口縁部 5/12	小破片以外は磨滅	007-01
24	土師器	杯G	SK10856 No.2	口径 器高	13.0 3.4	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	口縁部 3/12	粘土接合痕あり	004-05
25	土師器	杯G	SK10856 No.4	口径 残高	11.9 2.9	外面:ヨコナデ・ヘラナデ 内面:ヨコナデ・オサエ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完形		004-06
26	土師器	高杯	SK10856 No.3	底径 残高	13.4 6.9	外面:ヘラキリ・ハケ・ヘラミガキ・ヨコナデ 内面:ヘラミガキ・オサエ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	底部6/12	見込み面にドーマン状記号の刻書	019-02
27	土師器	甕	SK10856 No.8	口径 残高	25.7 4.9	外面:ハケ・ヨコナデ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 3/12	28と同一個体か？	006-02
28	土師器	甕	SK10856 No.8	径 残高	31.7 24.7	外面:ハケ・ヘラケズリ・オサエ・ナデ 内面:ハケ・ヘラケズリ	密	良	浅黄橙10YR8/4	底部 10/12	内面磨滅 27と同一個体か？	008-01
29	土師器	杯G	SK10856 下層No.2	口径 器高	13.9 3.6	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 4/12		004-03
30	土師器	杯G	SK10856 下層No.1	口径 器高	12.5 4.3	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	ほぼ完形		004-04
31	土師器	杯B	SK10857 No.5	口径 器高	15.6 3.4	外面:貼付高台・ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 7/12		004-01
32	土師器	杯A	SK10857 No.4	口径 器高	17.7 4.9	外面:ヘラケズリ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ・放射状暗文	密	良	橙5YR7/6	口縁部 6/12		004-02
33	土師器	皿A	SK10857 No.3	口径 器高	21.3 2.2	外面:ヘラケズリ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・オサエ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12	見込み面に不明刻書	021-01
34	土師器	鍋B	SK10857 No.6	口径 残高	38.4 14.6	外面:ハケ・把手貼付・ナデ・オサエ・ヨコナデ、内面:ハケ・オサエ・ヘラケズリ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 3/12		006-01
35	土師器	竈	SK10857 No.1	口径 残高	21.0 15.4	外面:ハケ・ナデ・オサエ・ヨコナデ 内面:ハケ・工具ケズリ	密	良	にぶい黄2.5YR6/3	口縁部 2/12		005-01
36	土師器	鍋A	SK10858 No.1	口径 器高	19.0 12.2	外面:ハケ・ヘラケズリ・オサエ・ナデ・ヨコナデ、内面:ハケ・ヘラケズリ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完形	内外面に煤付着	009-01
37	須恵器	杯A	SD10858	口径 器高	13.0 3.5	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5YR7/2	口縁部 3/12		007-03
38	陶器	山茶椀	SK10842 上層	底径 残高	8.7 2.3	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	やや不良	灰黄2.5YR7/2	底部3/12		001-07
39	土師器	杯A	SK10842	口径 器高	14.7 2.7	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 3/12		001-01
40	土師器	杯A	SK10842 No.1	口径 器高	13.7 2.8	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 6/12		001-04
41	土師器	杯A	SK10842 上層	口径 器高	15.7 3.0	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12		001-02
42	土師器	椀A	SK10842	口径 器高	16.9 3.6	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR7/8	口縁部 4/12		001-05
43	土師器	皿A	SK10842 上層	口径 器高	14.8 1.5	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12		001-06
44	土師器	甕C	SK10842 No.2	口径 残高	23.7 11.1	外面:ハケ・ヨコナデ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 2/12		001-03

第Ⅱ－３表　第 186 次調査　遺物観察表（１）

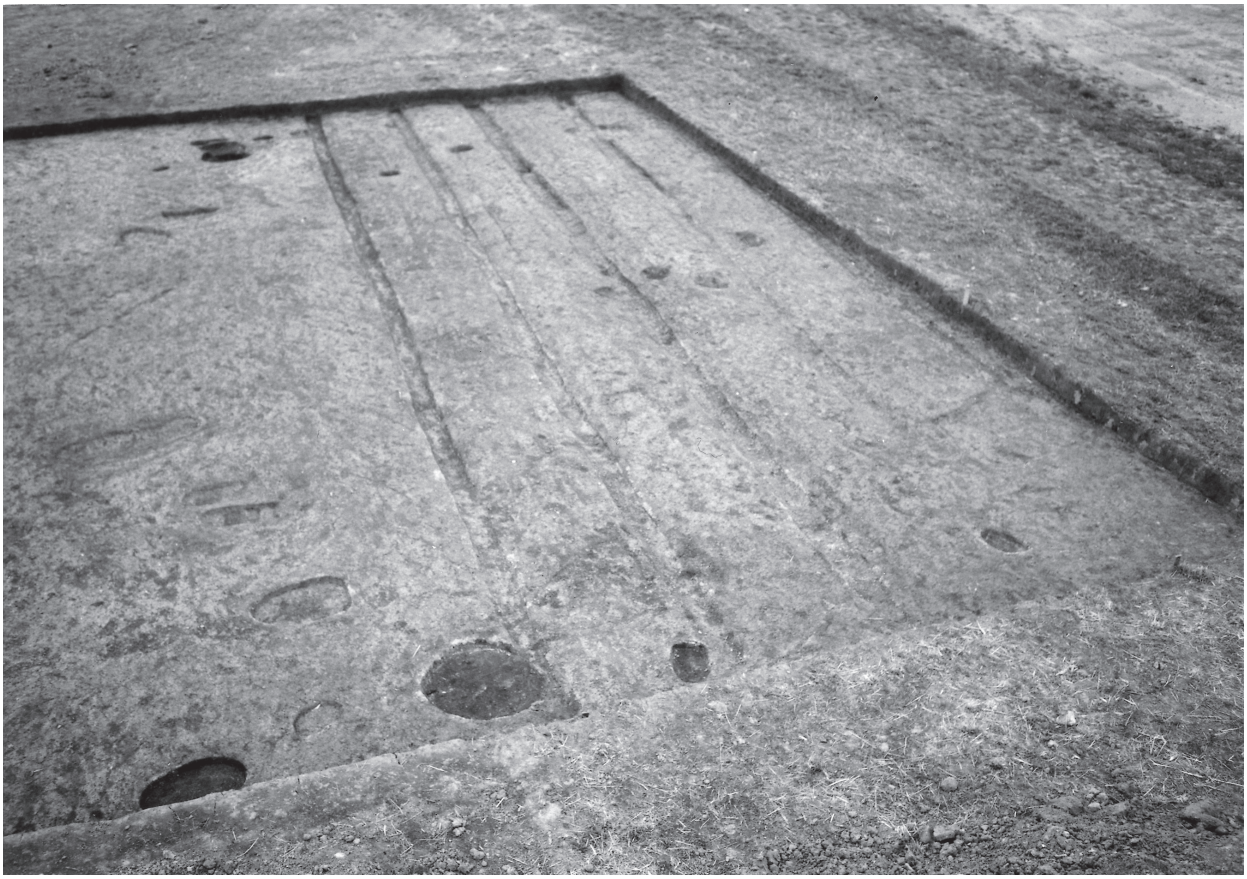
番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
45	土師器	杯A	SK10843 No.2	口径 器高	14.8 2.9	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 2/12	外面磨滅	002-03
46	灰釉陶器	椀	SK10843上 層	口径 器高 底径	15.6 4.8 7.6	外面:高台貼付・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:砂色800 素地:灰白2.5Y7/1	口縁部 5/12		002-05
47	灰釉陶器	皿	SK10843上 層	口径 器高 底径	14.5 2.7 8.0	外面:高台貼付・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:木蘭色964 素地:灰白2.5Y7/1	口縁部 9/12		002-02
48	須恵器	甕	SK10843 No.1	口径 残高	14.0 6.6	外面:平行タタキ・ロクロナデ 内面:工具痕・ナデ・ロクロナデ	密	良	釉:鶸茶815 素地:灰5Y6/1	口縁部 7/12		002-04
49	土製品	土錘	SK10843 上層	長さ 幅 孔径	5.2 2.0 0.55	全面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	ほぼ完形	重さ14.68g	021-02
50	須恵器	杯B	SK10844	底径 残高	10.1 3.0	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	底部1/12		002-08
51	須恵器	杯B	SK10844	底径 残高	7.8 1.9	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰7.5Y6/1	底部2/12		002-08
52	灰釉陶器	皿	SK10844	底径 残高	7.9 1.5	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:山鳩色822 素地:灰白5Y7/1	底部2/12	重ね焼き痕あり	002-06
53	土師器	椀A	SK10848	口径 器高	16.9 3.9	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 1/12		002-01
54	土師器	皿A	SB10853 o6柱穴3	口径 器高	21.6 2.5	外面:ヘラケズリ・ヨコナデ 内面:ヘラミガキ・ヨコナデ・螺旋状暗文	密	良	橙5YR6/6	口縁部 1/12未満	口唇部に刺突あり	012-05
55	須恵器	盤	SB10853 o7柱穴3	口径 器高	16.2 1.9	外面:糸切痕・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	不良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	生焼け	011-07
56	灰釉陶器	椀	SD10830	底径 残高	6.6 2.7	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:鶯色818 素地:灰白2.5Y7/1	底部5/12		014-02
57	緑釉陶器	椀	SD10830 上層	口径 残高	8.3 2.4	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:抹茶色838 素地:灰白2.5Y7/1	底部2/12	重ね焼き痕あり	021-03
58	瓦	平瓦	SD10830 上層	厚さ	1.9	凸面:縄目タタキ 凹面:布目、コビキ痕	密	良	橙5YR6/6	―		014-01
59	土製品	土錘	SD10830 上層	長さ 幅 孔径	6.5 2.8 1.1	全面:ナデ・オサエ	密	良	橙7.5YR7/6	完形	外面に鉄錆付着 重さ41.28g	021-04
60	石製品	温石	SD10830 上層	長さ 幅 厚さ	8.1 7.4 1.8		―	―	―	完形	結晶片岩	025-01
61	土製品	土錘	SD10836 上層	長さ 幅 孔径	7.0 3.2 1.0	全面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	完形	重さ50.67g	021-04
62	須恵器	蓋	SD10846 上層	口径 残高	17.3 1.4	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	暗灰黄2.5Y5/2	口縁部 1/12未満	盤か?	014-03
63	須恵器	杯B	SD10846 上層	底径 残高	10.1 3.5	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロケズリ・ロクロナデ、内面:ロクロナデ	密	良	灰7.5YR6/1	口縁部 1/12未満		014-04
64	灰釉陶器	鉢	SD10846	口径 残高	31.6 7.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	黄灰2.5YR6/1	口縁部 1/12		015-01
65	ロクロ 土師器	台付小皿	SD10847 上層	底径 残高	4.9 1.6	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	底部8/12		014-05
66	陶器	山皿	SD10849	底径 残高	5.0 1.3	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5YR7/2	底部4/12		015-06
67	陶器	山茶椀	SD10849	底径 残高	7.2 1.8	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	底部6/12		016-01
68	陶器	山茶椀	SD10849 下層No.1	底径 残高	7.4 2.5	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ・ロクロケズリ、内面:ロクロナデ	密	良	灰白5Y7/1	底部 完形	底部モミガラ痕	015-05
69	青磁	椀	SD10851 上層	底径 残高	7.4 2.5	外面:高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:根岸色987 素地:灰黄2.5Y6/2	底部1/12 未満	重ね焼き痕あり	022-02
70	灰釉陶器	小椀	SZ10841	底径 残高	4.9 1.2	外面:高台貼付・ナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部4/12		015-02
71	灰釉陶器	椀	SZ10841	底径 残高	7.2 1.6	外面:高台貼付・ナデ・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:抹茶色838 素地:灰7Y7/1	底部4/12		015-03
72	土師器	杯	SZ10845	口径 残高	13.7 2.5	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 2/12		013-07
73	須恵器	長頸壺	SZ10845 No.11	残高	6.9	外面:ロクロナデ・沈線 内面:シボリ	密	良	灰N5/	頸部 1/12		013-06
74	須恵器	円面硯	SZ10845	残高	3.2	外面:ロクロナデ・櫛刺突 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y6/2	脚部1/12 未満		022-04
75	須恵器	甕	SZ10845 No.69・70	底径 残高	17.7 7.1	外面:タタキ・オサエ・ナデ 内面:ナデ	密	良	灰白5Y7/1	底部2/12		013-01
76	灰釉陶器	椀	SZ10845	底径 残高	7.1 1.7	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部3/12		013-08
77	灰釉陶器	椀	SZ10845	底径 残高	6.5 1.5	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部3/12		013-03
78	灰釉陶器	椀	SZ10845 No.12	底径 残高	7.1 1.9	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部2/12		013-04
79	灰釉陶器	椀	SZ10845 No.7	底径 残高	7.5 2.7	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部4/12		012-08
80	灰釉陶器	椀	SZ10845 No.77	底径 残高	6.7 2.2	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部2/12		012-09
81	灰釉陶器	椀	SZ10845 No.18	底径 残高	6.9 1.7	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁部 3/12	重ね焼き痕あり	013-05
82	灰釉陶器	瓶	SZ10845 No.9	底径 残高	10.5 2.3	外面:高台貼付・ナデ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ・オサエ	密	良	釉:鶯茶814 素地:黄灰2.5YR6/1	底部2/12		013-02
83	陶器	山茶椀	SZ10845 No.2	底径 残高	7.4 2.7	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	口縁部 4/12	重ね焼き痕あり	012-07
84	陶器	山茶椀	SZ10845 No.5	底径 残高	6.2 1.6	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部1/12 未満	底部に墨痕あり	022-05
85	土師器	甕A	SK10855 上層	口径 残高	16.9 12.5	外面:ハケ・ヨコナデ 内面:ハケ・ヘラケズリ・ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12		003-04

第Ⅱ－４表　第 186 次調査　遺物観察表（２）

番号	器種	器形	地区 遺構	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
86	須恵器	鉢	SK10855 上層	残高	5.7	外面:ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰5Y6/1	—		003-07
87	灰釉陶器	椀	SK10855 No.3	底径 残高	6.8 2.5	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部1/12		003-07
88	ロクロ 土師器	小皿	SK10855 No.1	底径 残高	4.6 1.6	外面:糸切痕・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	底部5/12		003-05
89	瓦器	椀	p8p1	口径 残高	13.6 3.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ・沈線	密	良	外面:灰N4/ 内面:灰白2.5Y8/1	口縁部 1/12		012-06
90	土師器	椀	m1p5	口径 残高	14.6 3.2	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12		012-01
91	ロクロ 土師器	台付杯	m1p7	底径 残高	4.3 1.3	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	底部6/12	見込み面に墨痕	022-01
92	陶器	山茶椀	m25p1	底径 残高	6.3 2.3	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y8/1	底部3/12		012-02
93	土師器	小皿	l1p3	口径 器高	8.7 1.1	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	やや 不良	灰白2.5Y8/2	口縁部 5/12		012-04
94	土師器	小皿	l1p3	口径 器高	8.9 1.6	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	良	にぶい黄橙10YR6/3	口縁部 8/12		012-03
95	土師器	台	包含層	底径 残高	5.9 4.7	外面:ヨコナデ 内面:工具ナデ・ヨコナデ・ナデ	密	良	灰黄褐10YR4/2	底部9/12		017-06
96	灰釉陶器	椀	包含層	底径 残高	6.9 2.8	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:柳葉色835 素地:灰黄2.5YR7/2	底部6/12		017-01
97	灰釉陶器	瓶	包含層	底径 残高	8.3 3.7	外面:糸切痕・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部6/12		017-02
98	灰釉陶器	小型壺	包含層	底径 残高	5.0 1.9	外面:糸切痕・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:オリーブ色816 素地:灰白5YR7/1	底部1/12	小型模造品	023-07
99	灰釉陶器	瓶	包含層	底径 残高	15.1 3.1	外面:高台貼付・ロクロケズリ・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:灰白2.5YR7/1	底部3/12		017-03
100	灰釉陶器	鉢	包含層	底径 残高	13.0 4.4	外面:高台貼付・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:山鳩色822 素地:灰白2.5YR7/1	底部2/12		017-04
101	灰釉陶器	鉢	包含層	底径 残高	12.8 4.7	外面:高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰褐7.5YR4/2	底部2/12		017-05
102	青磁	椀	包含層	底径 残高	5.0 3.0	外面:ケズリ出し高台・ロクロケズリ・ロクロナデ、内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:灰白5YR7/1	底部6/12		024-01
103	白磁	椀	包含層	口径 残高	13.8 1.4	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:水縹993 素地:灰白2.5YR8/2	口縁部 1/12未満		023-06
104	白磁	椀	包含層	口径 残高	14.7 1.3	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:利休白茶812 素地:灰白2.5YR8/2	口縁部 1/12未満		023-05
105	白磁	椀	包含層	底径 残高	5.9 1.5	外面:ケズリ出し高台・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:灰オリーブ5Y6/2 素地:灰白2.5Y7/1	底部 ほぼ完形		024-04
106	白磁	椀	包含層	底径 残高	6.1 2.0	外面:ケズリ出し高台・ロクロナデ・沈線 内面:ロクロナデ	密	良	釉:青白橡989 素地:灰白5Y7/1	底部 2/12		024-03
107	白磁	皿	包含層	底径 残高	6.9 1.4	外面:高台貼付・ロクロケズリ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:象牙色789 素地:灰白2.5Y8/2	底部 2/12		024-02
108	青白磁	合子蓋	包含層	口径 残高	5.9 1.5	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:錆青磁856 素地:灰白5Y8/1	口縁部 2/12		023-03
109	土製品	土錘	包含層	長さ 幅 孔径	2.9 1.1 0.35	全面:ナデ	密	良	浅黄2.5Y7/3	1/2程度	重さ3.06g	023-04
110	石器	未製品	包含層	長さ 幅	4.1 2.8	—	—	—	—	—	黒色系チャート 重さ25.0g	025-02
111	土製品	土馬	表土	長さ 厚さ	14.5 8.4	全面:ナデ・オサエ 内部:脚部接合時の有機物痕	密	良	橙5YR7/8	尻尾部 のみ		026-01
112	土師器	杯	表土	口径 器高	14.1 2.8	外面:オサエ・ナデ・ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4	口縁部 1/12		016-05
113	土師器	高杯	表土	残高	10.7	外面:ハケ・面取り13面 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	脚部 のみ	杯部との接合面に刻み目	016-06
114	灰釉陶器	椀	表土	底径 残高	6.5 1.7	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:豌豆緑836 素地:にぶい黄2.5Y6/3	底部 3/12	重ね焼き痕あり	016-03
115	緑釉陶器	椀	表土	底径 残高	7.8 1.5	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:抹茶色838 素地:灰白2.5Y7/1	底部 1/12	猿投系	022-07
116	緑釉陶器	椀	表土	底径 残高	6.0 1.2	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:草色834 素地:にぶい黄橙	底部 3/12	近江系	023-01
117	陶器	山皿	表土	口径 器高	9.4 3.2	外面:糸切痕・高台貼付・ロクロケズリ・ロクロナデ、内面:ロクロナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	口縁部 7/12	内面に漆付着	016-02
118	白磁	椀	表土	底径 残高	5.7 1.9	外面:ケズリ出し高台・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	釉:象牙色789 素地:浅黄橙10YR8/4	底部 1/12		022-07
119	白磁	椀	表土	底径 残高	5.7 1.6	外面:ケズリ出し高台・ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	底部 3/12	重ね焼き痕あり	016-04
120	土製品	土錘	表土	長さ 幅 孔径	4.1 2.6 0.5	全面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	完形	重さ26.45g	023-02
121	陶器	三足香炉	カクラン	底径 残高	12.3 3.9	外面:糸切痕・ロクロケズリ・三足高台貼付・ナデ、内面:ロクロナデ	密	良	釉:煤竹色776 素地:淡黄2.5Y8/3	底部 3/12	トチン痕あり	018-01

第Ⅱ－５表　第 186 次調査　遺物観察表（３）

南調査区東側全景（北から）



南調査区西側全景（北から）

写真図版２

北調査区全景（北から）

ＳＫ 10856・10857・10858 出土状況（南から）

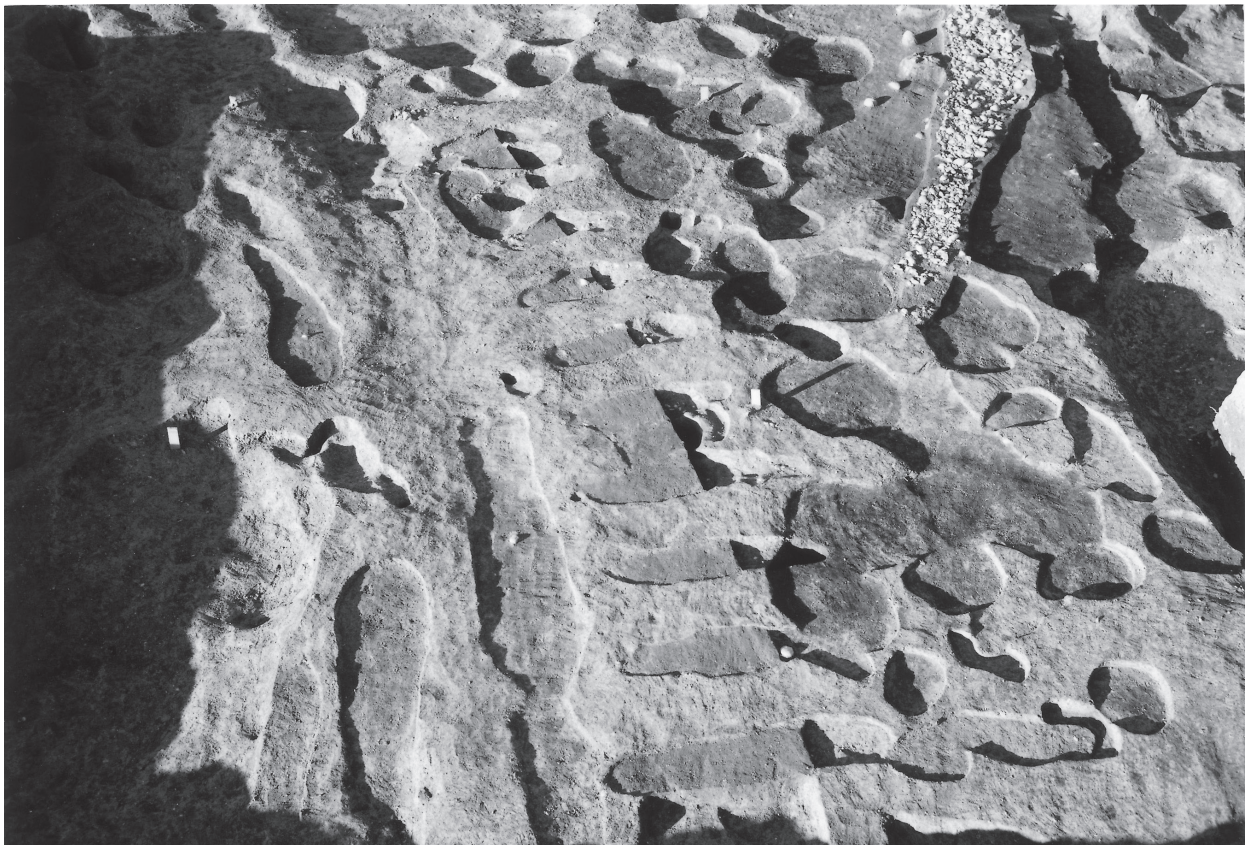
ＳＫ 10856 下層出土状況（南から）

ＳＦ 10850 南側（北から）

写真図版４

ＳＦ 10850 北西側溝群（ＳＤ 10831 ほか・北から）

ＳＤ 10830（東から）



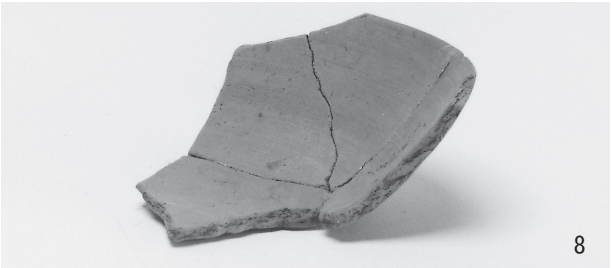
ＳＺ 10841（南から）

ＳＺ 10845（南西から）

写真図版６　出土遺物（１）

1

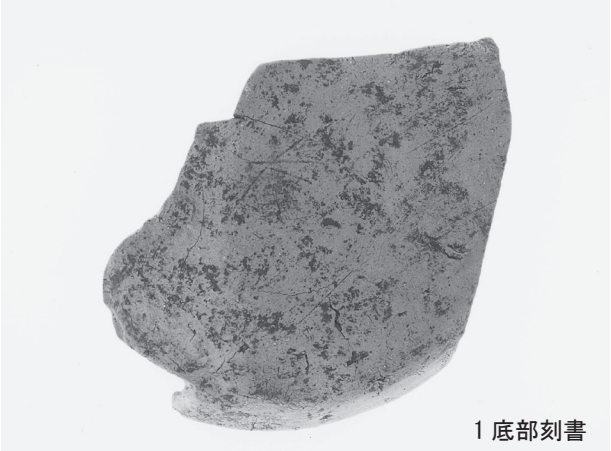
5


8

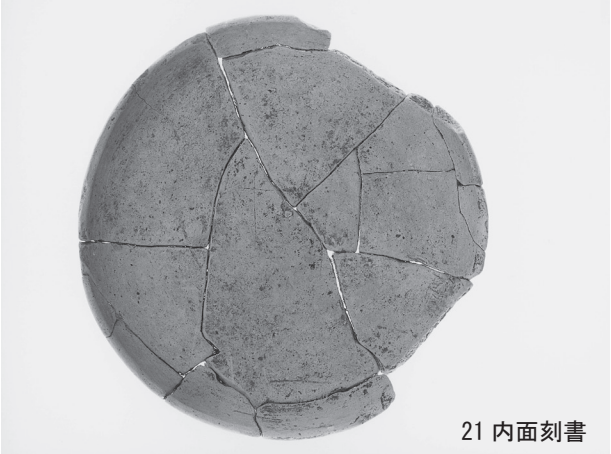
19

20

21


1 底部刻書

10


21 内面刻書

26

23

25

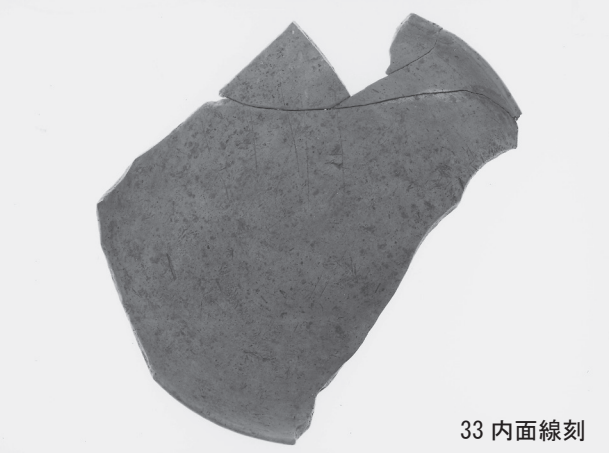
30

31

32

33

34


33 内面線刻

35

36

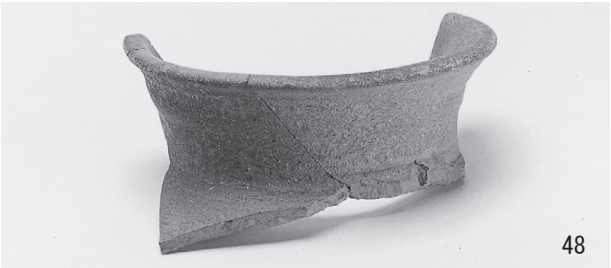
写真図版８　出土遺物（３）

40

42

46

47

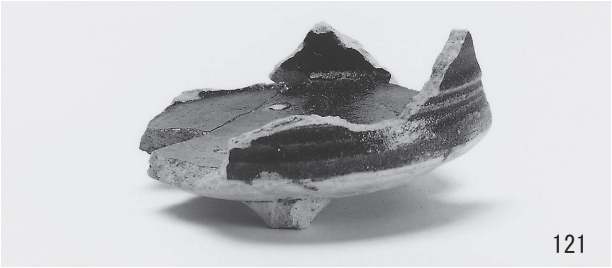

48

55

102

108

117


121

60

111

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきさいくうあと　へいせいにじゅうななねんどはっくつちょうさがいほう
書名	史跡斎宮跡　平成27年度発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	宮原佑治
編集機関	斎宮歴史博物館
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL0596-52-7027
発行年月日	西暦　2017年３月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
斎宮跡（さいくうあと）	多気郡明和町斎宮・竹川（たきぐんめいわちょう さいくう たけがわ）	24442	210	34°31′55″～34°32′30″	136°36′16″～136°37′37″	20151214～20160330	536㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
斎宮跡 第１８６次	官衙	奈良後～鎌倉	掘立柱建物 柱列　道路 溝　土坑	土師器 須恵器 灰釉陶器　緑釉陶器 山茶椀　瓦器　瓦 ロクロ土師器　白磁 青磁　青白磁 志摩式製塩土器 土馬　土錘 石製品 鉄製品	奈良時代後葉から平安時代初頭の道路側溝、平安時代末葉から鎌倉時代の道路、礫敷

要約	平安時代斎宮の方格地割でいう「下園東区画」の北西隅部から、方格地割の道路上の発掘調査である。調査区内では、奈良時代末葉に造成された方格地割の区画道路側溝やそれとほぼ同時期のドーマン状の記号が刻書された高杯、皿を中心とした多数の器種の土師器が埋納された土坑のほか、平安時代前期の土坑や掘立柱建物、平安時代末葉から鎌倉時代の道路、礫敷などを確認した。区画道路は造成初期の段階から鎌倉時代へと移り変わる中で、区画道路幅が３分の１程度までに規模を縮小していることが明らかとなった。さらに平安時代末葉から鎌倉時代には、道路交差点付近に波板状凹凸面が形成され、付近には道路あるいは周辺施設に関連する礫敷遺構の存在も確認した。

史　跡　**斎　宮　跡**

平成 27 年度

発 掘 調 査 概 報

2017 年 3 月 24 日

編集・発行　斎 宮 歴 史 博 物 館

印　　刷　株式会社アイブレーン